
MHP3rd 天を穿つ弓

綿雪ましろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MHP3rd 天を穿つ弓

【Nコード】

N5654W

【作者名】

綿雪ましろ

【あらすじ】

新米狩人である凍月天人は平均的な男性よりも遥かに筋力が弱かった。線が細く、モンスターの攻撃を食らえば一たまりもないような肢体。そんな彼がハンターになるには一般的な男性ハンターが扱う武器——太刀や大剣、ガンランスなどの近接系大型の武器ではなく、遠距離系中型の武器である弓を使うしかなかった。

始まりの街 ユクモ村（前書き）

オリジナルの設定が多数存在します。

微グロです。年齢制限はありませんが、モンスターハンターの推奨年齢以上の方を対象として書いております。

作者は中二病患者です。中二表現が苦手な方はここで引き返すことをオススメします。

ゲームに忠実ではありません。あしからず。

誤字脱字のオンパレードです。あしからず（死

以上のことを予めご了承ください。

始まりの街 ユクモ村

「お疲れ様だニヤ、ダンナ。ようやく着きましたよ」

「ダンナって……やめてくれ。俺はそんな年取ってないし実績もないし……」

荷台から降りてから青年は困ったように笑い、照れくさそうに後頭部を掻いた。ガーグアの上に乗ったアイルーはそんな青年の様子を見てため息を吐く。

やれやれと言わんばかりに首を振り、面倒くさそうに言う。そんな様子も、たくさんの修羅場を潜ってきたからであらう、一々様になっている。

「いいや、自信を持ってやいダンナあ。こう見てもハンターを見る目だけはあつてニヤあ。ダンナはいずれは大物になるぜい」

過度な期待だと思ったが、とりあえず青年はあ、と曖昧に、そしてやっぱり困ったように笑うのだった。

「それじゃあアタシャもう行くぜ。色々忙しい身分なんぞでな」

「ああ、ありがとう」

がんばれよい、と最後に一言残すと、草むらの虫をはんでいたガーグアに鞭を打った。驚いたガーグアがその足を動かし始める。

ぐんぐんと加速し、勢いよく繋がれた荷台を引っ張っていく。やがてその姿はすぐに見えなくなった。

必然、青年だけがその場に残される。

（……大物、ね……）

運び屋のアイルーが言ったことを思い出し、その青年は自嘲気味に笑った。

身長は一七〇センチ弱ほどしかない。これはハンターにしてはとも小柄なほうだ。それ故に以前いた街ではよくバカにされた。

体はとても華奢で、その線の細さは狩人であるとはとても思えない

い。小型モンスターの一薙ぎで折れてしまいそうな体つき。簡単に言ってしまうえばヒョロいのだ。

髪は漆黒の短髪。顔は整っており、その穏やかな雰囲気も相まって、狩人などやらず集会場のウェイターでもやっていればモテそうな容貌だった。

そしてその身につけている装備は、ハンターになると決めた者に最初に与えられる、所謂初期装備——ユクモ装備一式だ。

東洋の国——この青年の故郷である——の影響を多大に受けたこの装備は動きやすさこそあれど、その耐久性は乏しい。精々最初の簡単な依頼——クエストをクリアするのが限界だろう。

しかし、そんな初期装備には似合わない武器を青年は背負っていた。

ブナハブラの素材を使った美しい模様を持つ弓——？アルクセロジョーヌ？。

？アルクウノ？の派生先の一つであるこの弓には、雷光虫の発電機関とその効果を強化するライトクリスタルが組み込まれており、雷属性を帯びている。

ユクモ装備に似合わない弓を引っさげ、ユクモ村の大門を見つめる青年の名前は——凍月^{いてつきあま}天人。

？とある目的？の為にハンターになった、新米ハンターである。

階段を上り、大門をくぐるとそこにはどこか懐かしい、しかし少し異なった雰囲気を持つ町並みが広がっていた。

「うわぁー」

薬や笛、トラップツールやピッケルなどを売っている雑貨屋や初心者者の装備を整えるための武器屋、そして狩ったモンスターの素材を使って持っている武器や防具を強化したり、新しく作ったりする加工屋。

そこに住む人々をはじめ、屈強なハンターたちや狩りに役立つものを売ろうとする商人たちで賑わっている。

（ここがユクモ村か……なるほど、確かに俺の故郷に似てはいるけど、少し違うかな。俺の故郷の文化をベースに独自の文化が発達した、って感じかな）

村の様子を見ながら、ゆっくりと歩いていく。

あちらこちらに大きなや色のことなるたくさんの温泉が湯気を上げていた。驚くことに男女が混浴している。どころか、猫まで一緒に入っているものだから天人は困惑した。

（なんていうか……すげえ村だな……）

なんともボキャブラリーの少ないことを思いながら、女性の素肌を見て赤面し、うつむき加減に歩く。

そんなことをするから、前にいる人物にも気づかない。尤も、向こうの方も友人とお喋りしており前を見ていなかったのでもっともどっちだったのだから。

「うおっ」

「きやつ」

不意の衝撃に思わず倒れそうになるが、馬鹿にされないようにここは踏ん張る。

危ない危ないと胸を撫で下ろす前にはつとなり、慌てて天人はぶつかってしまった相手に頭を下げて謝った。

「すいませんっ。大丈夫ですか？」

「ああ大丈夫大丈夫。これぐらいモンスターの攻撃に比べたらなんでもないし、そんなに謝らないで」

「モンスター……？」

声は、明らかに女性のもの。恐る恐る目を開け、ゆっくりと頭を上げる。

極彩色の羽がふりふりと踊る装備——ペッコ装備の女性が、柔らかな笑みを浮かべていた。防具を着ているのをみて、ハンターなのか、と納得する。

身長は、主人公より少し低いぐらい。といっても、女性ハンターにしては高いほうであろう。さらさらと流れる金髪は、邪魔になる

からだだろうか、首の辺りで切りそろえられている。可愛い、というよりは美人という感じだった。

好奇心旺盛な子供のような笑みは、これまでに沢山の男を悩殺してきただろう。天人ももちろんその男の一人で、赤みがかかった頬をさらに真っ赤にした。目を少し逸らしたところで、後ろに下げている柄と鞘に気づく。

（太刀、使い？ でも、女性が？）

武器には、かなり大まかに分けて二種類ある。

モンスターとの距離を詰めて切り裂いたり、打撃を加えたりする近接武器——一般では剣士用武器と呼ばれるもの。

一方はモンスターとの距離をとって遠方から矢や弾丸で攻撃をする遠距離武器——ガンナー用武器と呼ばれるもの。

前者は基本的にモンスターとの距離を詰める以上、当然攻撃を受けやすい。それだけでなく、硬いモンスターの皮や鱗を切り裂くためにはなんといっても力が必要となる。

後者はというと、距離をとって戦うためにあまり攻撃を受けることはない。ライトボウガンや弓は剣士用武器に比べ軽く、非力であっても扱える武器だ。ヘヴィボウガンというのもあるが、これはガンナー用武器の例外と言えよう。

故に、一般的には剣士用武器は男性向けの武器であり、ガンナー用武器は女性向けの武器であるという暗黙の了解があった。実際、ガンナーの男性や剣士の女性は少ない。剣士の女性がいたとしても、片手剣や双剣といった軽いものを使っているハンターの方が多かった。

故に、確かに天人の疑問は尤もだが、それは天人にも言える事であった。天人の場合、本当に非力なため仕方ないではあるが。

「あれ、君、ガンナーなんだ。弓使い？ へえー、めずらしいね」
「あんたが言えたギリじゃないでしょ、リリー」

となりの女性が突っ込む。と、ここで初めて天人はぶつかった女性と話していた女性を見た。

装備はたれ耳のような頭防具が可愛らしい、ウルク装備である。背中に下げているのは双剣だったが、見たことがないため、天人は何という武器であるかまでは分からない。

こちらはぶつかった女性よりもっと小さく、一五〇センチほどしかなかった。髪型や色は防具に隠れて見えない。目も黒く、容貌が天人と同じ東洋のものであるので、恐らく黒髪だろうと予想した。目は少しつり上がっており、口調とあわせて少し勝気な印象を受ける。

こちらはこちらでまた十中八九が可愛いと言うような容貌していた。

（うわっ。どっちもレベル高……しかもウルクススとクルペッコって……。凄すぎる）

一人の男として、そして新米ハンターとして素直な感想を脳内で漏らす。

「あははは……確かにね。でもまあ、やっぱり珍しいものは珍しい」

「まあ、そりゃね……ってか、あんた線細いわね。装備もユクモだし、新参者？」

勝気な方の少女が天人に尋ねる。つつけんどんな物言いに少したじろぎつつも、天人は頷いて答える。

「ええと、今日ここに越してきた凍月^{いてつきあまと}天人です。よろしく」

「私はリリー・アイスバーン。よろしく」

「東雲^{つのめはむい}焰^ほよ。精々死なないように気をつけなさい」

「……はははは」

天人の場合、焰の言ったことはしゃれにならないので、引きつった笑みを浮かべるしかない。どうやら本当に勝気な性格ばいと天人は焰の人物像を確定した。

そんな焰の言葉に少しだけむっとしたような表情を作ると、リリ

「は子供をしかりつけるように言う。」

「こら焰。そんな言い方ないでしょ。素直に気をつけてね、って言えばいいじゃない」

「そんな親しい間柄じゃないし。ってか、そんなのあたしらしくないし。別に心配もしてないし」

「全く……ごめんね。この子、よく集会場のみんなからツンデレって言われてるのよ。本当は心配してるってこと分かってあげてね」
「なっ……！」

リリーの発言に一瞬で焰は顔を紅潮させる。そんな様子に慄く天人にちろりを舌を出して片目を睨り、悪戯っぽい子供のような笑みを浮かべた。

どうやら、これが彼女たちのコミュニケーションらしい。

「じゃあ私たちこれからクエストがあるから。また会いましょ、天人くん」

「あ、はい……って聞いてないし」

天人が答えるより早く、彼が歩いてきた道を走り出すリリー。待ちなさいっ、と焰が憤怒——周囲から見ると子供が怒っているようであり怖くはなかったが——の形相でその後を追いかける。

嵐の後の静けさに、というわけではないが、なんとなく一人取り残され寂しい気分になる。

何せ、彼はここに一人も知り合いがない。すると必然的にソロで狩りに行くことになる。新米ハンターにとってそれは心細いものなのだ。

少しだけ彼女たちを羨ましく思いつつ、彼はさっさと村長に合うべくその歩を再び始めた。

始まりの街 ユクモ村（後書き）

初めまして。 ましろ、と申す者です。

この小説は私がブログに載せているものをちょちょいと修正加筆したものです。

週間ユニークアクセスが思った以上に伸びたので、これからも不定期更新で続編を書くことに決めました。

完結までに時間がかかるとは思いますが、応援よろしくおねがいします。

その腕前

あの後、村長さんに挨拶をした天人は部屋を紹介してもらった後、集会場に来ていた。ギルドカードや部屋の手続きは驚くほど早く済み、今後の資金を貯めるべく簡単なクエストを受けた方がいいと判断したためだ。

（ジャギイとかブルファンゴとかの小型モンスターのクエストで、なるべく額がいいのは……）

クエストボードに貼ってある依頼を眺めていく。ちなみに、このボードのランクは星の数によって示されており、星一つから六つまでのランクに分けられている。

このランクは難易度、というよりも危険度を示すものであり、その危険度に応じて報酬の額も変わってくる。星六つのレベルになると、縄張り争いをする大型モンスター二匹や、繁殖期のために行動を共にする雌雄の大型モンスターを同時に相手することもあ
るのだ。

さらにこのボードは二種類あり、下位クエストのボード、そして上位クエストのボードに分かれている。上位クエストはモンスターの凶暴性や体力が一回りも二周りも上がっており、危険性がさらに増した依頼が張られている。

受注できるランクはハンターの実績に応じて上がっていく。ハンターの実績はハンターランクによって示される。ハンターランクが上がるとハンターの証であるギルドカードが更新され、そうしてようやく次のステップへ上がることが出来るのだ。

そして、今天人が覗いているボードは言うまでもなく星一つのクエストボードである。額は低いが比較的危険性の低いクエストしかない。その中でも条件のいいクエストを探して視線を巡らせる。そして彼の目に一つのクエストが留まった。

「お、ジャギイノス十匹で二千Zか……ドスジャギイでもいるのか

？」

注意書きを見る限りでは、特にそういう注釈はない。天人は暫くその怪しさに逡巡したが、結局額の良さに負け、そのクエストを受注することにした。

依頼の紙を取って受付嬢の元へと持っていき、クエスト受注の旨を伝える。

「あの、すみません」

「あ、こんにちは！ ハンターズギルド・ユクモ村出張所へようこそ！ クエストの受注でしょうか？」

元気のいい返事と、爽やかな笑顔に少し驚き、身を引いてしまう。しかしそんなことお構いなしにその受付嬢はまじまじと天人の顔を見つめ始めた。

気恥ずかしくなり、天人はうつむき加減に頬を掻いて尋ねる。

「えーと、何か？」

「あ、いえ！ 新米さんですか？」

「あー。そうです。今日ここに越してきました、凍月天人っていうんです。これからよろしくお願いします」

「おおー。礼儀正しい態度ですねー。関心関心。私の名前はコノハつていいいます。こちらこそよろしくお願いしますね。ええと、それで用件はなんでしょう？」

「このクエストの受注をお願いします」

ハンターズギルドとは、簡単に言えっしまえばクエストの管理者の集まりである。東西南北様々な地域からの依頼をまとめ、その依頼をランク付けし、クエストボードに貼り付けたりするのが彼女たちの仕事だ。

誤って複数のパーティが同じ依頼を受けるのを避けるため、クエストを受注するには彼女たちに申し出る必要がある。

「ふむふむ……ジャギノス十頭の討伐……」

差し出した依頼の紙にさらさらと何かを書き込んでいく。やがて受注のための処理が終わると顔を上げてニコリと微笑む。

「受注手続き完了です！ ではハンターさん、お気をつけて」
出発口はあちらです、と手を差し伸べてコノハが言う。初めてのことで少し照れくさく、しかし満更でもないという風に天人はその出発口へと向かうのであった。

猫の荷台で揺られること十数分。ユクモ村では定番の狩り場――
溪流へと到着した。

かつては集落があったらしいが、大嵐によつて吹き飛ばされたらしく、現在はもうない。しかしながら今でもその名残は見られ、住居跡や廃船、朽ちたつり橋などが見られる。

緑が豊かで水源も豊富なため、多くの動植物が生態系を構成するこの地は、それ故に多くの大型モンスターが縄張りを持つとする。溪流はユクモ村に近いだけに、依頼があとを絶える事がない。危険と思われるモンスターが現れるとすぐに討伐が依頼されるためだ。

また、狩猟だけではなく、溪流にしか生えていないタケノコや豊かな自然で丸々と育ったガーグアの卵の納品依頼も多い。

現在天人がいる場所は溪流のキャンプの一つの狭い高地である。ここからは美しい溪流が流れる谷を挟んで向かいの産地まで見渡すことが出来、数あるキャンプの中でもハンターから人気のキャンプであった。

もちろん、今日来たばかりの天人はそんなこと知る由もなく、ただキレイだな、と思っただけでそれ以上のものは何も感じなかったが。

（さて……ジャギイノスはどこだろうか）

照りつける日差しを遮るために頭防具、ユクモノカサを少しだけ深めにかぶる。

キャンプ地から出ると早速野性のガーグアに出くわした。丸々と

太つてとても美味しそうだ、初めて見た者は思ったりもするが、天人はただ和むなあと、平和ボケしたことを思っただけだった。

さらにそこから少し歩き、ようやく小型の鳥竜種の影が遠方でちらりと確認できた。天人は岩の物陰に隠れて畳んでいた愛弓を展開し、狙いを定める。

（さてと……じゃあ、行きますかつ！）

矢を取り出し、ぎりぎりと弦を引いていく。限界まで引いたところで、それを？天空？へと放った。

山なりに放たれた矢は途中でばらけ、雨のように見かけた鳥竜種に襲い掛かる。その降り注ぐ範囲は決して広いものではないが、しかしその全てが一匹の鳥竜種に命中する。

？曲射？。弓の強攻撃の一つであり、山なりに放たれた矢が途中でばらけ、雨となり襲い掛かる特殊な攻撃である。その種類には、広い範囲で降り注ぐ放射型、狭い範囲だが大型モンスターの翼などの部位を破壊しやすい集中型、そして着地と同時に爆発する爆裂型がある。

そして天人が持っている？アルクセロジョーヌ？は集中型なのであった。

雷の力を宿した矢の雨に襲われ、堪らずに絶命する。しかし、その倒れた鳥竜種はただのジャギイだった。こちらに気づいたジャギイやジャギイノスの群れが異変に気づき、喧しく鳴き始める。危機が群れに伝わり、全てが一斉に天人の方へと向く。ツチ、と舌打ちして、天人岩陰から飛び出した。

小型といえども列記とした肉食モンスターには変わりない。人間の数倍もの嗅覚の前では岩陰に隠れてもその意味はほぼないに等しい。

きりきりと弓を引きながら走る。前方からは、三匹のジャギイと二匹のジャギイノス。その内の最前を走る一匹ジャギイにまずは狙いを定める。

最前を走るジャギイが天人に飛び掛った。同時、限界まで引かれ

た矢が放たれる。

複数の矢が連続で飛んでいき、その全てがジャギイの顔面を捕らえる。顔を潰され、気づかぬうちに絶命するジャギイの脇を抜ける頃、既に第二射目の矢が引かれている。

次に迫るジャギイとジャギイノスの数は三匹。同じ手は通用しないとい瞬で理解し、限界の一手手前でその矢を放った。

放たれた矢は先のように連続して飛んでいくのではなく、途中で広がり、拡散する。三匹全てに矢が命中したものの、その矢にひるんだのは左と真ん中を走っていたジャギイだけ。右側にいたジャギイノスは多少のダメージなどものとせず走ってくる。

しかし、天人は慌てない。

左手で静かに矢を取り出すと、それを逆手に構えた。思い切りジャギイノスへと突っ込むようにして走り、衝突する寸前で少しその軌道を横へとずらしてすれ違う。途端、交錯する一瞬のうちに喉を裂かれたジャギイノスが倒れる。

そのまま前転し、大きく横へ跳ぶ。最後尾のジャギイノスの真横を捉えると、即座に弓を構えて再び矢を放った。同じように途中で拡散するも、その数は圧倒的に少ない。弓の特徴の一つ、弦の引き具合による矢の形式変化をうまく具合に使っているのだ。

最小限の力で引かれた弓の勢いは確かに今まで放たれたものの中で最弱だったが、それでも複数の矢が全て当たればそこその痛手にはなる。堪らずにひるむジャギイノスに急速に接近し、握った矢を思い切り急所に叩き込み、絶命させる。

しかし、まだ息を吐く暇はない。先ほどひるんだジャギイ二匹が時間差で飛び掛ってきた。が、これを冷静に大きくバックステップしてよける。

それでも距離を詰めようとするジャギイのうち、先頭に立つ一匹に狙いを定めた。

つま先で砂を巻き上げ、一瞬そのジャギイの視界を奪う。しかし、その一瞬は天人にとって十分すぎた。地を蹴って距離を一気に詰め、

取り出した矢で足を止めたジャギイの喉を切り裂き、止めを刺す。
その切り裂いた矢をそのまま引き、眼前で飛び掛らんとするジャギイへと放つ。拡散したとはいえ、至近距離では意味がない。全ての矢がジャギイへと吸い込まれ、どさりと墜落する。ぴくぴくと体を痙攣させるとやがて、そのまま息絶えた。

ふう、とここでようやく一息吐く。汗を拭い、まだ敵はいないかと周囲をうかがって安全を確認すると弓を折りたたみ、脱力したように座り込んだ。

「疲れたあ……あと八匹もやるのか。案外大変じゃんか。楽だななんて誰が言っただよったく」

こう言っているものの、全てのジャギイとジャギイノスを討伐するのにかかった時間は一分も経っていない。この手際の良さは最早初心者のもとは程遠いものだった。

——才能。

言ってしまうば、それだけ。

しかし、本人はそれを自覚していない。どころか、才能なんても持っていないとすら思っている。それは自分が非力で、線が細いことから周囲から馬鹿にされているために生まれた思い込みだった。それだけでなく？とある事情？を抱え込んでいるというわけもあるのだが。

天人は腰に下げたひょうたんの冷たい水で喉を潤すと、一括入れるように自分の太ももを叩き立ち上がった。

残るジャギイノスは八匹。とは言っても、それはあくまでここら一帯で確認された数でしかない。

あくまで討伐する数は依頼者が確認した数であって、それは？正確な数？であるとは限らないのだ。故に、ハンターは指定された数のモンスターを倒しても暫く指定地域一帯を歩き回ることが常識だった。

「さあつて。何といつても俺の初仕事だし、頑張ろう」
ひょうたんを再び腰に下げ、意気揚々と天人は再び歩を進めた。

嬉しくない出会いと幸運な再会と

弓を構えながら水辺を疾駆する。足を一步前に出すたびに水が跳ね、防具を濡らしていくことを気にしている余裕もない。

天人は現在、ようやく八体目のジャギイノスを含む群れを発見し、それと相見えていた。既に群れの残りはこのジャギイノスだけとなっており、狩ることは容易いだろう。

とはいえ、これまでに潰してきた群れの数は一五。群れの中にはジャギイノスがいないものもあり、その度に一々群れを潰していたものだから、天人は少し疲弊していた。

そして、その疲弊は当然、狩りにも影響を及ぼす。

突如、がくと天人の足元がもつれた。平地なら恐らくまだ普通に走れただろうが、水辺を走るのは体力を激しく奪われる。今回はそれが祟った。

「しまっ——」

その際に、矢があられもない方向へと飛んでいく。舌打ちをする暇もない。すぐさま前転して受身を取り、再び弓を構えるが、その頃には既に天人に飛びかかっていた。

「つくうっ！」

堪えることも出来ずに倒れこみ、ばしゃりと水飛沫を上げた。覆いかぶさったジャギイノスが天人を必殺すべく、喉に噛み付こうと狙いを定める——！

（喉！？ マズっ！）

その瞬間。

ぴたりとジャギイノスが動きを止め、その首を後方に回した。

もちろん、その隙を天人が利用しないはずがない。

天人を押さえつける足を矢で思い切り突き刺す。押さえつける力の弱まった一瞬を狙い、全身全霊の力を振り絞ってジャギイノスを跳ね除けると、後退しつつ最小限の動きと力でありったけの矢をジ

ヤギイノスの注ぎ込んだ。

数にものを言わせる、強引な手段。普段の天人なら絶対にやらないことだったが、タイムンという状況と死んでいたかもしれない恐怖から自然と手が動いてしまっていた。

やがて、ジャギイノスがその動きを完全に止める。それを見た天人は、へなへなとその場に座り込んだ。

防具の隙間からひんやりとした清水が心地よい。生きてる、という当たり前の実感を感じて天人は大きく息を吐いた。

「し、死ぬかと思った……。流石、日ごろからアケノプスだのケルビだのを狩ってるだけあるな……。ってか、どうして動きを止めたんだ……。？」

そういえば、という風に天人はそこで初めてジャギイノスが気を散らした方へと視線をやる。

「……あ？」

青い空に、こちらに飛来する小さな影。

羽を持ち、空を自由に飛び回るモンスターは限られた種類しかない。

「おいおいおいおいおい……っ！」

モンスターの中でも、特に危険なモンスターが多い種族——飛竜種。

強靱な翼。逞しい足。長く太い尻尾。凄まじい筋力でそれらを駆使して襲い掛かってくる飛竜種は、ハンターランクの高い者しか相手をすることを許されない。

理由は単純に、ランクの低いハンターが戦ったところで振り返ちにあって死んでしまうだけだから。

（勘弁、してくれ……）

がたがたと体が震えだす。

止まれ、止まれと両腕で体を抱く。しかし、震えは治まるどころかさらに激しさを増していく。

拳句——じゅくじゅくと？右腕に痛み？が走る錯覚に陥る。

（大丈夫だ。落ち着け。冷静に対処しろ）

普通に考えて、まず飛竜種に勝てるはずがない。

生まれたばかりのケルビのように震える足を拳で殴りつけ、立ち上がる。その足取りはおぼつかなく、先ほどの勇ましさなど微塵も感じられない。

（どうする？ 物陰に隠れてやり過ぎか……）

段々と近づいてくる影に、いよいよ天人の焦りがピークを迎える。
（どうするどうするどうするどうするどうするどうするどうするどうする……）

だらだらと嫌な汗が背を伝っていく。

やっこの思いで一番近くの大木の陰に隠れると、一気に脱力し、尻餅をつくようにして座り込んだ。大きな深呼吸を一つして、冷静になろうと努める。

顔だけを覗かせ、新たな脅威の姿を確認する。ゆっくりと降りてくるモンスターの羽ばたきの音はそう遠くない。ごくりと、緊張に生唾を飲んだ。

しかし、その天人の心配は杞憂に終わる。

（……え？）

飛竜種に比べると小さな水音を立てて降り立ったのは？鳥竜種？

——極彩鳥、クルペッコだった。

「な、なんだよ……脅かしやがって」

ほっと一息吐く。？飛竜種でないなら？例え大型モンスターであろうと問題ない。

（なるほど、ね。たかがジャギイノス十匹であんなに値がよかったのはこういうことが……。備考の不足。しかも故意的。ギルドに要報告だな）

ギルドに帰った後に出来ることが早速出来る。出来ればこのクエストが終わったらすぐにでも休みたかったのだが、これは重要なこ

とだ。

出現モンスターの情報は丁寧でなければならない。討伐対象が例え小型だとしても、そのエリアに出るモンスターが危険度の高いモンスターであれば、無論それだけクエストのランクは上がる。

クルペッコは大型の飛竜に比べると小さい中型のモンスターだが、それでも初心者が相手をするには荷が重い。少なくとも、天人の受けたクエストのランクは星一つでは収まらなくなるはずだ。

そつと身をかがめ、クルペッコをなるべく刺激しないようにこの場を離れる。

大型のモンスターは知性が高い。危険がないと判断すれば襲い掛かってくることもないのだ。ハンターを好んで攻撃してくるモンスターは、一部の小型モンスターを除きあまり多くないのである。

「お前には用がないんだよつと……」

小声で呟きながら、ひっそりと移動する。ふと、クルペッコがこちらに気づいた。攻撃の意思はないし、相手もまさか襲い掛かって気やしないだろうと高をくくり、あまつさえ手を振ってみたりした。

——その途端、クルペッコが甲高い声を上げて怒り出した。

「……え？」

想定外の出来事に天人は思わず動きを止める。そうしている間にも、クルペッコは両翼に付いている石を打ち鳴らして火花を散らし、攻撃のモーションに入る。

「俺が何したってんだ！」

どうすることも出来ず、？アルクセロジョーヌ？を展開してクルペッコに背を向けた。

倒すためではなく、逃げるための戦闘。とはいっても、中型以上のモンスターとの戦闘はこれが初めての経験となる。

それは間違いなく今後の経験値になるはずである。

クルペッコが天人めがけて大きくステップを踏む。打ち付けた石

が散らす火花が一際大きなものとなり、炸裂した。

（うお——っ！？）

咄嗟に前転し、これを避ける。五、六メートルもの距離をステツプ一回でゼロにしたその強靱な足もそうだが、なによりその攻撃性能に天人は戦慄した。

当然ながら、中型といえどもその火力は侮ることなど出来ない。ましてや、このクルペッコは激昂しているのだ。その攻撃力は通常の状態を遥かに凌駕する。

さらに、ハンターランクの低い天人は今まで小型モンスターしか相手をしたことがない。故に、属性付加された攻撃を初めて見たのだ。焦りはより増していく。

前転した直後、素早く反転しクルペッコに向き直る。クルペッコはまだその石——火打石を打ちつけようと構えており、連続で爆発させるようだった。

クルペッコがステップを踏んだ瞬間、矢を左手で抜き取って即座にスライディングの要領でクルペッコの懐に入り込む。クルペッコの真下をくぐる形となり、足を矢で切り裂いた。

「っ！？」

が、矢で切り裂いた足は、大した手ごたえを感じることが出来なかった。一瞥を向け、瞬時にその傷を確認すると少し裂けて血がにじんでいる程度。その鱗の強固さに驚愕し顔をこわばらせつつも、冷静に前転して受身を取ってクルペッコの方へと向き直った。

鋭い足の爪がかすって避けた頬から、ツウーっとな血が流れる。

爆発に遮られ、突然視界から消えたように見えた標的を探すのに二秒。その二秒でバックステップでしつつ矢を放って距離を稼ぐ。弾ける水音にクルペッコが振り向く。

ここで初めて、天人はこのクルペッコと真正面から対峙した。そのクルペッコの姿を見て、ようやく突然襲ってきた理由を天人は理解する。

クルペッコはすでに傷まみれで手負いの状態だった。体や羽、嘴

には無数の切り傷があり、美しい極彩色の羽がところどころ赤く染まっている。

「ってことはここらで誰かがコイツとっ！」

ハンターがモンスターを見失わないように投げつけるペイントボールの臭いを感じない。恐らく、ペイントボールの効力が切れるというタイミングでクルペッコが逃げ出したのだろう。

ということとは。

一瞬でも期待した助けはすぐには来ないということになる。

しかし、クルペッコの飛んでいった方向で大よその検討はつけているはず。冷や汗を流しながらも、視線だけをクルペッコに向けて逃走する。そんな中でも冷静に頭をめぐらせて対策を考える。

（今持っているものは、回復薬が三つに閃光玉が二つ……畜生、こんな奴がいるって知ってたら閃光玉なんてジャギイに使わなかったのにっ！）

考えている間にもクルペッコはぐんぐんとその差を詰めてくる。

折角作った距離は、クルペッコにとってないにも等しいものでしかなかった。

「つくしょうっ！」

弓を振るい、慣れた手つきでそれを一瞬で畳むと、下げてあるポーチから閃光玉を取り出してピンを外した。それを後ろに放り、ぎゅっと目を瞑る。

甲高く響く、クルペッコの悲鳴。

厳しい自然に生きるモンスターは人間よりも遥かに視力がいい。故にこういった強烈な光には弱く、その場で混乱してしまうのだ。無論、何度も使用するとモンスターはその適応力を働かせて段々と効き目が薄くなる。

とはいっても、その混乱は精々十数秒から数秒。天人はその時間に大木の陰に隠れるのがやっとだった。

首を振り、混乱から立ち直るクルペッコを見やり、今後の対応を慎重に考える。

（このまま身を潜めてクルペッコが去ってくれるのを待つか？ いや、小型モンスターもここらにはいる……いつまで隠れていられるかも分からない）

今でこそ相手をしているのはクルペッコ一体だが、いつかここらを住処とする小型モンスターに見つかるか分からない。隠れているからといって、決してそこが安全であるとは限らない。

（こっちから仕掛けるしかないか……）

足は既にかくかくと笑い始めている。疲労が溜まっていた足に鞭打つての全力疾走で、既に天人は限界に近かった。

手ごろで平べったいな石を拾い上げ、それを握り締めてクルペッコを見やる。

依然としてきよろきよろと天人の姿を探している。天人は自分が隠れている方向とは反対のほうを探している隙に、その石をスナッブをきかせて回転をかけ思いつきり投げた。

ところがその石はクルペッコから大きく逸れ、そのまま川へと――落ちず、軽快なリズムを刻んで跳ねた。

その音にクルペッコが反応する。

「っ！！」

一瞬の隙。その隙を突いて天人は影から飛び出し？アルクセロジヨーン？を展開、矢を放つ。

クルペッコの背後にありったけの矢を注ぎ込んでいく。指と指の間に矢を挟み一度に四の矢を同時に抜き取り、矢を抜く動作を短縮、最大限の速度で矢を放出する。

一際大きな声を上げてクルペッコが怯んだ。雷を纏う矢はかすっただけでも凄まじい電流で皮膚を焼く。それが次々と刺さっているのだから、そのダメージ量は相当なものであるはずだった。

「倒れるおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

額に汗を滲ませ、咆哮を上げる。腕は既に力が入らないぐらいに震えている。それでも矢を放ち続けられるのは、火事場の馬鹿力という奴であろう。

やがて、クルペッコが悲鳴も上げずにがくりと倒れた。はあはあと荒い息を吐きながら、天人はそれを呆然と眺める。

「やった、のか……？」

？アルクセロジョーヌ？を右手に持ったまま、無用心にクルペッコに近づいていく。

熟練のハンターなら、こういうときは石を投げつけて見たりしてその生死を確認する。しかし、天人はこれが初めての中型以上の戦闘。

そしてなりより、？初めての戦闘で倒した？という達成感から危機感が麻痺していた。

故に気づかない。

クルペッコは、ただ膝を突いただけであると。

「！？」

先ほど彼が出した声とは比べ物にならないほど大きな咆哮を上げ、突如動き出したクルペッコに驚愕する天人。慌てて矢を抜き取るうとするが、扇状に開かれた尻尾をぶち当てられ、大きく吹き飛んだ。その際、不覚にもハンターの命である武器を手放してしまった。

ばしゃばしゃと盛大に飛沫を上げながら水辺を転がる。

「っ痛——！」

声を上げる余裕もない。すぐに立ち上がると叩きつけられたわき腹を押さえ、自分の武器を探す。

幸い、天人からそう距離は離れていない。彼は大きく跳んで前転すると弓を取り、矢を構えた。しかしその頃には——もう遅かった。火打石を叩きつけ、大きくこちらへ踏み出すクルペッコの姿がその瞳に映る。

そこで天人はあるうことが、反射的に目を瞑ってしまった。

（あ、俺死——）

そう思った途端だった。

ギンッ！ というモンスターの嫌う高音と、

ギャア！ というクルペッコの悲鳴。

そして、天人の脇を駆ける二つの足音。

「あらあら、誰かと思えばさっき街で会った天人君じゃない」

「なんでこんなところにいるの、よっ！」

聞き覚えのある声。うつすらと目を開けると、そこには天人より少し背の低いクルペッコ装備の女の子とそれよりもまた一回り小さいウルク装備の女の子がいた。

つかの間の安心、最悪の到来

二人は見事なコンビネーションでクルペッコを翻弄していた。洗練された鋭い刃が右翼を切り裂き、極限まで研ぎ澄まされた二つの閃きが左翼を切り刻む。

お互いが常にお互いを意識し、決して味方を傷つけることはない。そんな二人を天人は啞然として眺めていた。そんな様子をちらりと見やり、焰が叱咤する。

「ぼさつとしてないでさっさと退いてなさいっ！ 邪魔っ！！」

「あ、す、すいません」

小さな女の子に怒鳴られていそいそと後退していく。少しだけ自分情けなくなる。

そこからは、ほとんどワンサイドゲームだった。

攻撃のパターンを既に知り尽くしているのだろう。クルペッコの攻撃が全くあたらない。

時折クルペッコの反撃がくるも、どれも掠る程度で決定的な攻撃は全てかわされていた。

磨きぬかれた技術。

圧倒的な手数。

目を見張るような立ち回り。

そして何よりも、踏んできた場数。

何もかもが、天人から程遠いものだった。

(……ああ、俺はやっぱ——)

やがて、クルペッコは一際大きな声を上げる。

それは悲鳴というよりは、残りの力を振り絞って何かを呼ぶような、助けを求めるような咆哮。

しかし、それまでだった。力尽き、ぐらりと体を揺らすと極彩色の羽を散らしながら水辺に身を横たえた。

（――まだまだなんだなあ）

二人の戦いっぷりに、思わず嘆息する。

「あらら？　なんだか随分とあっさりと倒してしまったわね、今回。今まではもうちよつと強かったと思うんだけど……」

戦闘が終わったのを確認し、天人は木の陰からようやく身を出して二人に駆け寄った。リリーがばやいているのを聞いて、肩をすばめる。

「あ、すみません。襲われたのでちよつと戦闘しました。その際に結構なダメージを与えちゃったのかも」

「はあ？」

驚き、というよりも呆れに近いだろうか。焰が信じられないものでも見たかのように天人を見る。それはリリーも同じようで、驚愕の表情を浮かべていた。

「あんた、新米ハンターのくせしてクルペッコとやりあってたの？　馬鹿じゃないの？　死にたいの？」

「え、ええと、俺も本当は戦うつもりなんてなかったんだけど、どうやら君たちと戦って人間に対して敵対心があつたみたいでさ。俺を見るなりいきなり襲い掛かってきたから、仕方なく……」

「そもそも、どうしてこんなところにあんたがいるのよ！？　今日ユクモ村に来たばかりなんでしょ！？」

「思ったよりも早く手続きが終わったから、今後の資金稼ぎにでも出ようとジャギイノスの討伐に出てただけど、どうやらエリアが君たちの搜索範囲と若干被ってたみたいだね」

「なんていうか、本当に偶然が重なったみたいだね……。まあとにかく、これはギルドの不注意だから、あとで報告しておくとして。今はとにかく勝利を喜びましょう」

「すみません、と困ったように曖昧に笑う天人を見て、リリーはふと思う。」

（私たちがクルペッコを手負いにしたとは言っても、まだ結構な体力は残っていたと思うんだけどね）

彼女たちがクルペッコを見失って見つけるまでにかかった時間は、およそ十五分。クルペッコが飛行していた時間は大体三分ほどだろう。

すなわち、彼は初めてのクルペッコとの戦闘で、あまつさえクモ装備という最弱クラスの装備で十分以上も戦っていたことになる。それも、かなりいい線で。

（初めて戦ったときは、二人で十分ももたなかったんだけどなー。みつともなく敗走にまわったっけ）

それは剣士とガンナーという違いもあるだろうが、それでも装備や人数を考慮に入れると間違いなく彼の戦闘時間は長い。

へらへらと笑いながら、最早怒っているのか安心したのか分からないようなことを延々と続ける焔を受け流す天人の才能にリリーは興味を持った。

あるいは、自分たちのパーティの穴を埋められる人材かもしれない、と。

「大体、初心者のかせにでしゃばりすぎなのよ！ 引越してきた日ぐらい休んでれば――」

「はいはい。焔のお小言はもうとーっても天人くんの身にしてみたはずだから、さっさとクルペッコの素材を剥ぎ取って帰りましょう」

「がみがみと喋る焔を引つ張り、クルペッコの素材の剥ぎ取りに入る。羽や鱗、クチバシ、火打石が剥ぎ取られていく。」

そんな二人の様子を眺めるだけの天人に焔がツンと刺々しく言った。

「あんたも木偶の坊みたいに突っ立ってるんじゃないでさっさと剥ぎ取りなさいよ」

「え？ でも俺はこのクエスト受けてないし、倒してないんだけど」「あーもううじうじっさい！ さっさと剥ぎ取りなさい！」

「そうよ天人くん。クエストを請け負ってないといっても、クル

ペッコを瀕死まで追い込んだのは紛れもなく君なんだから」

リリーも剥ぎ取るよう催促した。天人は二人に許可を貰って初めておずおずとクルペッコから素材を剥ぎ取り始める。

剥ぎ取り、といってもモンスターの全身から皮、鱗、羽を全て剥ぎ取るわけではない。倒したモンスターの一部から目立たない程度に剥ぎ取るだけだ。これは古くからの伝統で、倒したモンスターに一定以上の敬意を持つことを暗示しているらしい。

元々は、狩りは集落の暮らしを楽にするためのものだった。良質な皮や羽があればそれだけ上質な服が作れる。かつてのハンターは殺した命に感謝の念を持っていたのだという。

三人もクルペッコからあくまで剥ぎ取られた部分が目立たない程度に素材を剥ぎ取ると立ち上がった。

「さて、それじゃあ私たちはあつちにキャンプがあるから」

「はい。俺はまだあと二体ジャギイノスを倒さないといけないので、もう少ししてから帰ります」

「油断なんかしてやられたりなんかするんじゃないわよ。あんた、ただでさえなんか抜けてそうだし」

あははは、と少女の辛らつな言葉に力なく笑って頂垂れた。さつき、本気で死に掛けた事実もあり、己の未熟さにかつくしと肩を下げる。

「狩りはギルドに着くまでが狩りだからね」

「遠足じゃないですか、それ」

「うるさい。突っ込むな一々バカ」

「ごめん……」

どうも彼は焰に頭が上がらないようだった。そんな様子をニコニコと眺めているリリー。三人の力の序列はどうやら既に決まっているようだった。

「じゃあまた後で」

「ええ、ギルドで会いま——」

言葉は、不意に途切れた。

クルペッコより一回りも二回りも大きな影が、三人の影を塗りつぶした。三人が一斉に空を上げる。

——ギヤアアアアアアアアアア！

大気を揺るがす咆哮。クルペッコのそれとは違う、圧倒的な音量。耳が潰れかねないそれに、三人は同時に耳を押さえた。

？バインドボイス？。文字通り、それは鼓膜をつんざくような声でハンターの動きを縛ってしまう。

空を飛び、バインドボイスを出せるようなモンスターなんていうのは限られている。

翡翠色の鱗が体を覆う大型の飛竜、リオレイアがそこにいた。

（あ……）

再び、体が硬直する。

幼少期の記憶がフラッシュバックして、がたがたと体が震え始めた。

焰はそんな天人の異変に気づき天人の背中をさすって尋ねる。

「ど、どうしたの？ 気分でも——」

「焰！ 天人くん！」

リリーが叫ぶ。ゆっくりと降り立つリオレイアは目に見えて気が立っており、口元には灼熱の炎がちらちらと散っている。

（どうして——？）

呆然とリオレイアを見る。焰とリリーが何か言っているが、何も耳に入っていない。

幼少の頃の記憶が蘇る。

——銀色に輝く、太陽の王者。

（ああ。そういえば……）

目の前の脅威に危険感覚が麻痺した天人はぼんやりと考える。そういえば、息絶える前に一際大きな声で鳴いていた。あれはこのリオレイアを呼ぶものだったんじゃないか。

クルペッコの特徴は、何よりもその発達した発声器官である。その発声器官を伸縮させることで様々な音域の音を出すことが出来、身に危険が及ぶと鳴き声をまねることでその場の近くににいるモンスターを呼ぶことがあるのだ。

もしかしたら、値が高かったのはクルペッコがいたからではなく、リオレイアがいたからじゃないか、と思い——左の頬に熱い衝撃。「しっかりして！ 逃げるわよ！」

顔を真つ赤に染め上げてがくがくと天人の体を揺さぶる焰がいた。頬の痛みは、恐らく平手打ちによるものだろう。

それでも呆然とする天人を、半ば引きずるような形で引つ張り、逃げる。地に降り立った陸の女王は、それをやすやすとは逃がそうとしない。

口元で散る火が一層強いものとなる。来る、とリリーは今までの狩猟の経験で感づいた。

「よけて！」

直後、全てを焼き尽くす地獄の火球が飛んでくる。

全力で横に飛んだ。すれすれで火球が脇を抜ける。ちりちりと肌の焼ける感覚に、三人は戦慄した。

「っ！」

迷っている暇はない。焰は天人の手を引いてる右手はそのままに左手で閃光玉を取り出すと口でピンを外し、後ろは見ずにそれを放り投げた。

強烈な閃きと、リオレイアの悲鳴。

振り向く時間さえ惜しい。三人は力の限り走り、混乱が解ける寸前で岩陰に身を隠す。

（稼げた距離は……ざっと五十メートルぐらいかしら。焰と私だけ

ならまだしも、この状態の天人くんを連れての逃走はちょっと厳しいわね……)

天人は岩陰で膝を抱えて震えている。尋常じゃない反応に、二人はそんなに怖いのかと不思議に思う。でも、危険度が違うとはいえクルペッコとはいいい線で戦ったのに何故。

視線を逸らし、岩陰からこっそりと窺ってみると、リオレイアは依然としてリリーたちを探している。小さく舌打ちし、現在の持ち物を確かめる。

(あるのは……シビレ罌と、閃光玉が三つ。音爆弾が二つに回復薬と砥石。逃げるだけなら……なんとかなるかしら)

視線だけで焰にも持ち物の確認を促す。

焰がポーチの中を晒すと、リリーはその中を覗き込んだ。不幸中の幸いか、合わせて閃光玉は七つ、音爆弾は三つあった。

(逃げに必要な道具は十分ね)

そう判断し、？念のために？リリーは愛刀である太刀——？鉄刀【神楽】？の刃を研いだ。クルペッコの戦闘で欠けていた刃が途端にその切れ味を取り戻す。

同様に焰も愛刀の双剣、？スノウツインズ？を研ぐ。

焰が双剣を研ぎ終えた直後。

「——！？」

「っ！」

大地が跳ねた。慌ててリオレイアを見れば、探すのにうんざりしたのか、あちらこちらに火球を放っていた。

火球にあたった木々は、直径五十センチはあろうかという幹を一瞬で炭化させ、めしめしと音を立てて倒れる。ぞっとする光景に、しかし冷や汗を流しつつもリリーと焰は薄く笑う。

モンスターといえども、人間と同じように生き物であることには変わらないのだ。

火球を放つことは大きくスタミナを消費するはずである。スタミナの切れたモンスターは、その攻撃力や俊敏性が大きく落ち、攻撃

するにせよ逃げるにせよ大きなチャンスとなる。

二人は視線を重ねて頷いた。それだけで意思の疎通が取れているのを見ると、とても深い信頼関係にあることがうかがえる。

「天人くん、逃げるよ。立てる？」

リリーが小声で天人に話しかける。辛うじて、といった様子で頷くものの、リリーはそんな天人を見て逃げ切れるのかと不安に思う。天人はリリーが差し出した手を引き、なんとか立ち上がった。

「焰」

「オーケー」

逃げ出す方向とは逆向きに、焰は何かを放る。

瞬間、甲高い炸裂音。音爆弾がモンスター嫌う高音を撒き散らす。

遠すぎたのか、元々効果が薄いのか、リオレイアが平然として鋭い視線をそちらへ向ける。その隙に脱兎の如く走り出した。

全力の疾走。後ろを振り向くこともなく、ただひたすらに走る。

途中、リリーが走ったまま後ろに閃光玉を投げた。それが爆発すると同時に、強烈な閃光が辺りを白く染める。

足が水を蹴る音でもはや何も聞こえない。あるいは？そもそも悲鳴が上がってない？のか。天人は背後で何も聞こえないことに疑問を抱いた。しかし、全力疾走中に話しかけることもできない。

スタミナが許す限り全力で走った三人は、二分ほど走ったところでようやくその足を止めた。後ろを確認するも、リオレイアの姿は確認できない。

「撒いた、かしら？」

「ええ。撒いたっぽいわね」

息も絶え絶えに焰が答える。吐き出す息が熱い。水場は既に抜けたようで、木々の茂る森の中に三人は入っていた。

空は風にそよぐ葉に覆われてその姿の大半を隠している。

体が熱い。喉が渴いた。どこかに水はないだろうか。

水源豊かな溪流だからこそその疑問。焰はあたりをきよろろと見回す。リリーも安心しきった様子で汗を拭って倒木に腰を下ろしていた。

ただ一人、天人だけが釈然としない様子で空を眺める。

「あ、湧き水」

目聡くちよろちよると湧き出る水を見つける。

ラッキー、と先の全力疾走による疲労を感じさせない足取りで焰がそこへ近寄った。ユクモ村特有の竹製の水筒をとりだし、それを汲もうとした。

「焰！ 後ろだっ！」

静けさを断ち切るような、天人の切羽詰った声。ほとんど無意識に大きく横へ跳ぶ。

直後、今さっき焰が立っていた場所が爆ぜた。

身を転がしながら背中中の双剣を抜き取る。リリーもすぐさま太刀を抜いた。鈍い銀色が新緑の鱗を映す。

倒木の近くにいるリリーと天人、そして湧き水の傍にいる焰の丁度中間ぐらいの位置にリオレイアが降り立った。その鋭い眼光が焰を突き刺し、萎縮させる。

（飛んでいたのか。くそっ）

陸の女王と呼ばれていても、元は飛竜。その強靱な翼を羽ばたかせ、天高く舞うことなど造作もない。

三人とも理解する。このリオレイアから逃げることは出来ない。生きたければ戦うしかない、と。

「天人くんは逃げて！ 私たちがこいつは引き受ける！」

「な——」

何を言ってるんだ。そうは言えなかった。

幼少の頃、天人は飛竜に襲われた。

元々森を一人、奔放に駆け回ってはケルビを追いかけたりするよ
うなやんちゃな子供だった。天人の住む村の近くの森には肉食系の
モンスターがほとんどおらず、厳しく注意する者などいなかった。
故に事件は起こる。

いつも通り森で遊んでいたとき。大人しい草食系モンスターであ
るアケノプスたちの背に乗っていた最中だった。

突然に天人が背に乗っていたアケノプスたちが狂乱し、天人はそ
の背中から振り落とされた。群れは恐慌し、我先にと逃げ出す。

何事だろう。幼い天人は、それに何の疑問も抱かない。

ふわりと天人の髪が風に靡いた。突如起きた風に驚き、天人は振
り向く。

——銀色の太陽が、そこにはいた。

恐怖を通り越し自我を失った天人は、ぼんやりと銀に煌く飛竜を
眺めるだけ。

やがてその太陽は高らかに吼える。鼓膜が破れそうな咆哮に、耳
を押さえぎゆつと目を瞑った。

(……あ?)

妙な浮遊感。気づけば、体が宙を舞っていた。ゆつたりと流れる
景色。直後、墮落。

体を地面に強く打ちつけ、息が詰まる。げほげほと咳をして何と
か呼吸を整えると、体を起こそうと右腕に力を込めた——はずだっ
た。

? 力が入らない?

ゆつくりと首を動かし、右腕を見る。

「あ」

右腕はぎっくりと挟まれ、滝のような血を流していた。傷を見た
瞬間、灼熱の痛みが右腕に走る。

「あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ！！」
右腕を押さえてのた打ち回る。痛い。熱い。何で？ どうして？
血が止まらない。どうしよう。

激痛と恐怖から涙がこぼれる。怖い。助けて。死にたくない。誰か。誰か！

「ひぐつ！」

ふとサファイアの双眸と目が合い、息が詰まる。睥睨されているだけ。にもかかわらず、天人は首を絞められるような息苦しさを覚えてた。

ゆったりとした足取りで、されど着実に天人に近づいてくる。

(殺される)

痛みも忘れ、恐怖に天人は後ずさるうとする。しかし右腕に力が入らない。左腕と両足を使い、座り込んだまま後退した。

（死にたくない）

怖い。だが、目を離せない。目を離したらきつと自分は食われてしまう。そんな錯覚に陥る。

焦りからうつかり右手を使ってしまった。あ、と声を漏らし、その場に転がる。激痛の走る右腕を押さえ、苦悶の声で呻く。

ずしり、と何かが大地を踏む音がした。

気づけば目の前には、銀の飛竜。

「助けて……」

口元でぎらつく刃は、てらてらとよだれで不気味に光っている。

人間だって空腹を満たすために魚を取り、モンスターを殺す。

それと、同じ。

これはただの食事なのだ。

「助けてッ！！」

絶叫も空しく、大顎を開き、銀の太陽は天人に齧り付こうとした。

刹那——鋭い閃き。

ギヤアアアアア！ 銀の太陽が吼える。突然のことに何が起きたか分からない天人は、しかししっかりと見た。

先まで天人を飲み込もうとした口には、矢が刺さっている。

「大丈夫か少年」

静かな声。振り向くと見知らぬハンターがそこにいた。屈強な体には無数の傷があり、熟練したハンターであることがうかがえる。手には弓が握られており、男にしては珍しいガンナーのハンターだった。

放心したままゆったりと首を縦に振ると、そのハンターは笑って、「逃げろ」

ただ一言。それだけ。

天人は駆けた。今まで出したこともないような速さで。後ろで、激しい爆発音が響く。恐怖でびくつきながらも、その足の動きだけは絶対に止めない。

涙がこぼれる。恐怖？ それもちろんなった。痛み？ 激痛は確かにつらい。しかし、天人はただ、悔しかった。

（何のために、俺はハンターになったんだっ！）

恐怖から、体が震える。そんな自分を情けなく思う。それでも――体は動かなかった。

「早くっ！」

「っ！」

天人は逃げ出した。あの時のように。ただ自責の念に駆られながら。

降りしきるは雷の雨

天人が逃げたのを横目に確かめ、改めてリオレイアと対峙する。その視線は焰の方を向いていて、一先ず天人を追いかけることはなさそうだった。

すこしだけ落胆する。天人は自分が思っていたほど大したことはないのかもしれない。過大評価だったか、と。

「焰！」

「うんっ！」

強く地を蹴り、二人は接近する。

吐き出された火球を紙一重で避けると、リオレイアの懷に潜り込んだ。

氷結の刃がリオレイアの首を切り刻む。しかし、その強固な鱗は斬撃をはじき返し、大した傷を負わせることが出来ない。

歯噛みする。クルペッコの鱗より堅い。

焰とすれ違いざま、リリーが太刀を思い切り振り下ろす。これもやっぱり大した傷を付けられない。若干血が滲む程度。

二人はほぼ同時にリオレイアの元から離脱、距離を取る。基本的に大きな相手は小型のモンスターよりも俊敏性に欠ける。あくまで小型と比べて、だが。それでも距離をとるだけの隙はあった。

再びリオレイアを挟む形になる。

火球は避けられると踏んだのか、リリーに向かって突進を仕掛けてきた。

「ツク！」

リオレイアを中心に円を描くように走るが、避けきれない。一瞬でそう踏んだリリーはリオレイアの突進が当たる直前、大きく後方へ跳び、衝撃を和らげる。

「リリー！」

「大丈夫ッ！」

踏ん張り、何とか倒れずに大きく後ずさる。痛みに顔をしかめつつ、傷を確認。

骨は……折れていない。

そうは言ってもかなりの痛み。痣になっているのは間違いないだろう。今の突進。距離をとるのはまずいかもしれない。

リオレイアはリリーを吹き飛ばした後反転し、焰の方を向いていた。今度は火球。前転で危なげなく避ける。

「張り付くよ！」

リリーの一声で二人が同時にリオレイアとの距離を詰めた。太刀と双剣。合わせて三つの閃きがリオレイアを切り刻む。

鬱陶しそうにリオレイアが羽ばたき、宙へと逃げた。その際に火球を放つ。二人はステップを踏むように左右へ避ける。

——これは、チャンスだ。

リリーが納刀した。一秒にも満たない間に閃光玉を取り出し、視線だけで言葉を交わす。

焰が大きく退いた。同時、世界が白く染まる。

聞こえるのはリオレイアの悲鳴。そして地に落ちる音。

強く地を蹴り、気を練り上げる。

？鉄刀【神楽】？を抜き取り、それを頭上で大きく円を描いた後、左斜めに振り下ろす一閃。力を振り絞り、強引に再び振り上げ右斜めに振り下ろす一閃。勢いをそのままに、∞の字に刀を振るう。

そして、太刀の必殺の一振り。

「はあああああああああああ！」

白銀の刀身が白い光を纏い始める。踏み込みざま、大きく身をよじり、一回転。

？気刃大回転斬り？。

先程とは違う、確かな手応え。これは——間違いなく斬った。

悲痛な声が辺りに響いた。閃光玉によるものとは違つ、もつと悲痛なもの。散る血飛沫がそのダメージを物語る。

「焰っ！」

「任せて！」

そのままリリーは納刀し、離脱する。入れ違いになるよう今度は焰が懷に潜り込むと、双剣を打ち付け気合を込める。

氣を高ぶらせ、己の力を解き放つ。

（――鬼人化ッ！）

刀身が赤く光始めた。焰が？スノウツインズ？を振るう。鬼人の力を纏った双刃が無数の閃きを放つ。

幾重もの斬撃がリオレイアの鱗を、皮膚を、肉を抉っていく。

「これで……どうだっ！」

トドメの一撃。渾身の力で氷結の双刃を叩きつける。裂ける肉の感触に、確かな手応えを焰も得た。

そのまま滑るようにステップを刻んで一気に距離をとる。再びリオレイアを挟むような形となった。

倒れこんでいたリオレイアが立ち上がる。息を潜めていた炎がちらちると口からまた散り始めた。

体をしならせ、再びバインドボイス。耳を押さえて体が硬直する。二人は齒噛みした。

リオレイアが体を俊敏に反転させリリーに向き直る。攻撃が来ると分かっているにもすぐに動くことが出来ない。

大きく体を仰け反らせた。モーションが大きい。

（火球？ いや、動きが違う）

ハンターとしての勘。しかし、初めてまみえる相手に、どんな攻撃が来るか分からない。

まず見えたのは火球。自分の勘が違ったのか？ 咄嗟に大きく跳んで回避を試みる。が――

「な!？」

その火球が途中で炸裂した。

(爆発なんて――!)

「くああ!」

避けきれずに巻き込まれる。爆発の火炎と爆風で体が大きく吹き飛ばされた。

全身が焼ける痛みに顔が引きつる。それでも受身をとるあたりは流石といったところか。

「リリー!」

「大丈夫だから! 前!」

焰が一瞬リリーに気を逸らす、即座にそれを一喝する。太刀は構えたままにざっと自分の体を一瞥すると、かなりのやけどを負っている。

(クルペッコ装備じゃなかったら確実に死んでたわよ、コレ)

自分が身につけていた装備に感謝する。ペッコ装備は一見、肌の露出が高く無防備に見えるが、その実極彩色の羽は緩衝性に優れ、火にも強い優秀な防具なのだ。

それでも今の攻撃はかなり効いた。次はない。

回復薬を塗ろうにも、リオレイアを前にしてはそんなことできる筈もない。リリーは地団太を踏む思いだった。

そろそろ閃光玉の効果もあまり期待できない。一瞬、怯ませることが出来てももって数秒であろう。

(リリーは実質戦闘不能ね……。立っているのがやつとって感じだし)

ぎりつと歯軋りをした。一対一じゃまず間違いなく勝てない。かといって、もう逃げることも叶わないだろう。

絶望的な状況だった。

ハンターが狩猟中に命を落とすことなんてしょっちゅうな話だ。しかしその話に自分たちの名前が上がると思うとぞっとする。

（まだ……死にたくないし、死ねない。だけど……）

考える。まだシビレ罠はある。だが、あれを設置するにはどんなに短くても十数秒はかかる。

八方塞の状況。冷や汗が流れる。かくなる上は……

「リリーは一先ず逃げて！」

「でも……」

「立つてるのがやつとでしょう！ 足手まとい！」

リリーがぐつと言葉を飲み込む。焔の言葉はもつともだった。彼女はすでに肩で息をしており、見るからに限界に近い。

？犠牲は一人で十分？。

どちらも死ぬよりも、どちらかが死に、どちらかがこいつを討伐するためにパーティを呼んだほうがはるかにいい。

「すぐに助けを呼ぶから……それまで耐えてっ！」

やがてリリーは逃げ出した。その決断の速さは確かに熟練を思わせる。リオレイアの意識はずっと焔を向いており、リリーの逃走に気づく気配はない。

仲間が助かるという安堵と自分が死ぬ恐怖。

？強がり？なんて言わなければよかった。そう思ったところでもう遅い。一人という状況が、さらに彼女を追い立てる。

（……いいわ。ぎりぎりまで足掻いてやるわよ！）

精々、気を強く持つ。それだけしか出来ない。

雄叫びとともに突進を仕掛けてくる。ぎりぎりまでリオレイアを引きつけ、横に大きく飛び込み前転。間一髪、突進をさける。

体を跳ね上げ、背後を見せるリオレイアに特攻する。足元に潜り込むと、素早く両腕を振るった。

一太刀、二太刀と連撃を入れる。

（狙うのは足だけっ！）

リオレイアの鱗は確かに強固だ。それでもずっと同じ箇所さえ斬っていれば、あるいは。

足に無数の傷が刻まれていく。リオレイアは数歩移動すると鬱陶しそうに尻尾を薙いだ。すれすれで再び足元に潜り込み、再度リオレイアの足を斬り刻む。

いつまでも纏わりつく焔を振り払うように宙へ逃げた。こうなっ
てしまつては焔にどうすることもできない。バックステップで距離
をとり、相手の出方を窺おうとする。

が、すぐさま距離を詰められる。こんな距離、リオレイアにはあ
つてないに等しい。

ホバリングしたまま焔の真上を位置取ると、大きく体を揺らした。
(今度は何！？)

空中からの攻撃まであるのか。未知の恐怖に焔は舌打ちした。前
転して回避。直後、背後に肝を冷やす風。

宙に浮いたまま一回転し、尻尾を振るつたのだ。そうと分ならず、
たちまち立ち上がってリオレイアの方を向く。

眼前にあるのは大きく振るわれる強靱な新緑の尾。咄嗟に双剣を
交差させ、それを受けた。そうしてすぐに後悔。

(しまつ——！？)

大きな衝撃に体が飛ぶ。そして自分より高い位置に舞っている物
を見て、焔は絶望した。手にあつたはずの剣がない。

くるくると宙を舞っているのは二本の愛刀。それも、華奢な刀身
は先の攻撃で刃が欠けていた。もともと、双剣は防御できるように
出来てない。折れずに済んだだけで幸運だった。

(あたしの？スノウインズ？が！)

一本は地を滑ってさらに遠くへ転がったが、一本はすぐ傍の倒木
に突き刺さった。

受身を取り、すぐさま倒木に刺さった一本を回収。続いて自分よ
りさらに後方へ飛んだ愛刀を回収しようとするが、リオレイアはそ
れを許さない。

灼熱の火球が焔を襲う。咄嗟にそれを避けるも、今度はリオレイ
ア自身が迫っている。

「無理だつて！」

悲鳴じみた怒声が空しく響く。衝撃を殺そうとバックステップをしようとしてみるも間に合わない。

直撃。

「かはっ——」

肺にある、全ての空気が吐き出される。どころか、ポーチまでもが自分の腰から飛んでいき、ばらばらと中身が散った。絶望を横目に、強く木に体を打ちつけ地に落ちる。

横隔膜がどうかしてしまったのか。息を吸おうにも詰まってしまうて吸い込めない。ぜえーぜえーと嫌な呼吸音が耳に障る。

（なんて、ザマ）

手元には何も無い。視界は点滅し、足腰には力が入らない。

（……リリーは、助かったかしら）

ぼんやりと仲間のことを考える。気の強い焰と気さくに付き合ってくれる、大切な仲間であり、信頼できるパートナー。

迫ってくるのは新緑の翼竜。ちろちろと口から零れる炎は激しさを増し、怒りは収まるどころか、さらに増しているようだった。

（死にたく、ないな……）

死は覚悟したはずだった。しかし、目の前の現実を直視した途端こうだ。

リオレイアが地を蹴る。死が、迫ってくる。

（本当に、なんてザマ）

恐怖からか悔しさからか、恐らくその両方だろう。ぼろぼろと涙が流れる。

激昂するリオレイアはもう目の前。その強靱な歯は、容赦なく焰の喉を噛み砕くだろう。

（死にたくないよ——！）

「助けっ……」

声すら出ない。むせて大きく咳き込む。

大きく口を開き、ぎらつく牙が見えたとき、焰はぎゅっと目を閉

じた。だから、見えない。

降りしきるは雷の矢。

矢の雨はピンポイントでリオレイアの頭部を襲う。堪らずにたじろみ、悲鳴を上げて焔の脇の太木に突っ込んだ。

そこで初めて、目を開ける。軋んだ音を立てて倒れる太木と、傍で倒れこむリオレイアを見て、目を白黒とさせる。一体、何が？

「これで貸し借りなし、かな？」

背後でする声に、一体どれだけ安堵したか。慌てて涙を拭う。

「……リリーとあたしを置いて、逃げたくせに。軟弱男」
振り向く。

その視線の先には、弓を構える天人の姿があった。

その天人は焔の声に苦い顔をする。

「……飛竜に、ちょっと嫌な思い出があつてね」
「嫌な思い出？」

オウム返しに尋ねるが、ふいつと視線が焔から流れるのを見てハッとなる。

リオレイアが起き上がっていた。先の攻撃で左目をやられたらしい。左目は閉ざされ、今はその右目だけがきらきらと光っている。

立ち上がると激痛が走った。悟られないよう、冷静に頬が歪むのを抑える。

「無理はしないでいいけど」
「む、無理なんか！」

叫んだだけで激痛。不意の痛みに我慢できず、たまらずにわき腹を押さえて苦悶の表情を浮かべる。

「ほら見る」
「うるさい」

頬を赤く染め、はにかみながら睨む。だが天人の視線はずっとリオレイアに注がれていた。自分が完全に気を緩めていることに気づき驚く。

リオレイアは新たな敵の出現に、こちらを窺っているだけで攻め入ってこない。

「俺が仕掛けるから、焰はその隙に自分の武器を」
「分かった」

流石に逃げろ、とは言ってこない。自分の身の程はしっかりときまえているようだ。少しだけ、天人のことを見直す。

見れば、少しだけ震えていた。岩陰に隠れていたときのようにあからさまなものではないが、それでもはつきりと目に見えるほどには弓が揺れている。

「あんたこそ、無理しないほうがいいんじゃないの」

「泣いてた女の子には言われたくないな」

「……ッ！ 言ってなさいッ」

軽口を叩き、二人は走り出した。天人はリオレイアを中心に円を描くように。焰は自分の得物を取りに。

終結

時は少し遡る。

森を走る。ただ、走る。

「ハッハッハッ！」

息が続かない。それでも、恐怖を振り払うように天人は走った。新緑の翼竜が脳裏をよぎる。ちろちろと舞う火の粉。ぎらつく牙。鋭い爪。

突然、ずきりと完治したはずの右腕が痛む。思わずに持っていたものを手放すと、それは地を滑っていった。

「あ」

光を受けて？アルクセロジョーヌ？がきらきらと光る。足を止め、天人はそれを呆然と見やった。

意識していなかったが、どうやら納刀せずに持ったまま走っていたらしい。

鈍い動作でそれを拾い上げ、あたりを見回す。気づけば先ほどの水場へと戻ってきていた。ここからは見えないが、少し探せば倒したクルペッコが横たわっているだろう。

さわさわと流れる水をぼんやりと眺め、やがて大げさにそこに座り込んだ。さらには横になる。

自分は一体何をしているんだろう。自分を助けてくれた二人を置いて逃げて。

情けない。

「……ッ！」

強く水面を叩き付けた。激しい飛沫が自分の顔にまでかかる。誤

って吸い込んでしまい、大きくむせた。

起き上がって激しく咳き込む。暫くしてからようやく咳は収まった。

「……クソ」

誰に対するものなのか、天人にも分からない罵声。

あるいは、それは自分自身へ向けての言葉だったのかもしれない。時間だけが無為に過ぎていく。クエストは制限時間が設けられている。こんなことをしているぐらいなら、残り二匹のジャギノスを狩ってしまった方がいい。

そう思い直して緩慢な動きで立ち上がると、ふと背後で何かの気配を感じた。

「——！！」

狙いをつけず、即座に振り返り矢を放つ。矢は途中で分裂し、拡散した。その内の一本がその何かへと鋭く迫る。

——白い閃光が走る。

矢はその一太刀で真つ二つになり、その何かの脇に逸れていった。驚き、慌てて矢を引いたまま弓を構える。しかし、その矢が放たれることはなかった。

「いやぁ……お姉さんの目に狂いはなかったかな。こちらも見ないで、人間大の大きさの物に矢を当てるなんてね」

その声は、リオレイアを前に逃げると言った少女のもの。草木の茂みからゆらりとその姿を見せる。

「リリーさん！」

「あははは……ちょっと、私たちにはちょっと荷が重かったみたい。おかげでこのザマよ」

全身が火傷だらけだった。白魚のようだった白い肌は赤くただれ、綺麗だった金髪もところどころ焦げてしまっている。今の天人の攻撃で全ての力を使い切ったのか、愛刀の鉄刀【神楽】を地面に突き

刺し、杖のようにしてそれにもたれる。

慌てて駆け寄り肩を貸した。お礼を言う余裕すらないらしい、リリーは熱い息を吐くだけで、ほとんど天人にしなだれかかるような形になっている。

リオレイアにやられたのか——そう思い、天人は自分の愚かさを呪った。二人なら、大丈夫だと思っていたところがあった。クルペッコ相手にほとんど無傷。それは新人の天人にしてみたら確かに凄いことだっただろう。しかし、クルペッコを何頭狩ったところで、リオレイアは格が違うのだ。対策もせずに初見でどうにかなる相手ではない。

そこまで考えて、ふと違和感を覚える。どうしてリリーしかない？ 一緒に逃亡してきたのではなかったのか？ そしてそれが意味するところは――

肩を貸していたリリーが突然、力をこめた。そうなると自然、リリーに抱きしめられるような形となる。装備ごしでも柔らかいものを感じ、思わず赤面するが、リリーの表情が真剣であるのを見て、天人も気を引き締める。

「何が、あつたんですか？」

「……まだあんまり経験のない、君にこんなことを、頼むのは、間違ってるって分かってる」

お互いの吐息がお互いの顔にかかるぐらいの至近距離。だというのに、ぎりぎり聞こえるか聞こえないかという声量。

リリーが天人の方を向いた。整った美貌が崩れ、今にも泣きそうな表情になっている。それだけ必死なのだと、天人にも分かった。

途絶え途絶えになりながらも、リリーは言う。

「焰を、助けて」

自分に注意をひきつける為に矢を放った。複数の矢が深々とリオレイアの翼に突き刺さり、体を雷撃が襲う。

だが相手は飛竜。それ如きじゃびくもしない。リオレイアは天人めがけて火球を放った。前転を二回連続してそれを避け、リオレイアの真横に位置すると抜き取った矢を再び放つ。

今度は拡散し、首から尻尾にかけて矢が刺さっていく。が、お構いなしにリオレイアは天人に突っ込んだ。

体がすくむ。だけど立ち止まることなんて出来ない。素早く弓をたたんで納刀すると、リオレイアがぶつかるぎりぎりのところで全力で前へ跳ぶ。ずさーっと地を滑り、少し皮膚が裂けたが、これぐらいなんてことはない。

すぐに起き上がり、再び弓を展開。こちらを振り向くと同時、強く引いた弦を放つ。

複数の矢が連続して飛んでいき、それら全てがリオレイアの顔に深々とささった。悲鳴をあげて二、三步と後ずさる。

それをみすみす見逃す天人ではない。大きく弓を引くと、それを天高く放った。曲射され、途中でばらけた矢はリオレイアの背に降り注ぐ。

「天人！」

背後から声がかかる。それだけで天人は大きく後退、すれ違うようにして焔がリオレイアへと突っ込んでいく。

手には？スノウツインズ？が握られている。刃こぼれは研がれてなくなっているが、その刀身は少しだけ歪んでいるようにも見えた。「バックアップする！ 無理はするな！」

「分かってる！ あんたも無茶は厳禁よ！」

リリーは素早くリオレイアの足元に潜り込むと、二つの剣を打ち

つけて気合をこめた。刀身が赤い光を帯び始める。

飛び散る鮮血すら凍らせる、赤い双刃。リオレイアは鬱陶しそうに尻尾を振るい、焰をなぎ払おうとするが、上手い具合にリオレイアの移動に合わせてステップを踏み、これに当たらない。

初めて見る鬼人化を横目に、天人はリオレイアを中心に大きく旋回しながら？ざっと周囲を確認しつつ？、時折曲射で焰を援護するやがて、リオレイアが宙へと逃げた。鬼人化を双剣を交差させるように振るって解除し、素早く後退。対照的に天人は接近し、離れようとするリオレイアから一定の距離を保つ。

弦の引き具合を調節し、拡散や連射を交えながら矢を放っていく天人にこんどは狙いを定めたらしい。ホバリングしたままの体勢で天人に近づき、大きく体を震わせた。

「避けて！」

焰が叫ぶのを聞いて、天人は反射的にバックステップ、そして横跳びをしてリオレイアの振り回された尻尾を避ける。離れた位置からも感じる風に天人の背に冷や汗が伝った。

体を宙で二回転させたりリオレイアは、しかしそれでもしつこく天人を追跡、再び同じ動作を繰り返す。

「つなろ！」

大きく前転し距離をとると、素早く弓を構えて矢を放つ。幾重にも突き刺さる雷の矢。ついに体に流れる電撃に耐えかね、リオレイアは悲鳴を上げて尻尾を振るう途中で地に落ちた。

「焰！」

「了解っ」

再び、入れ替わる。今度は焰がリオレイアの懷に潜り込み、天人が距離をとる。

自然と彼らは？スイッチ？と呼ばれるパーティならではのコンビネーションを成し遂げていた。

攻撃する者が前に出、それ以外の者は下がって次の攻撃に備える。

パーティのうちでの？切り替え？。

パーティのメンバー全員がモンスターの懐に潜り込んでしまうと、誤って味方同士で傷つけかねない。故に、初心者が組んだパーティでは基本的にスイッチを繰り返して戦うことが多い。

特に、太刀や大剣、双剣、スラッシュアックス、ガンランスなど振り回したり砲撃したりして使うタイプの武器を使う面子のいるパーティに多い。

双剣は一撃一撃の攻撃力は低いが、それを補えるだけの手数が多さが売りだ。しかし、それは逆に言えばそれだけ切れ味が落ちやすいということでもある。さらに、双剣の秘技である鬼人化はスタミナを激しく消耗する。

今回の場合は、スイッチした焰は天人が戦っている間に双剣を研いだり、鬼人化で消耗した体力を取り戻したりして次の戦闘に備えていた。

再び鬼人化し、地に伏せて悶えているリオレイアを切り刻んでいく。遠方からは弓の援護もあり、リオレイアの声も明らかに出現した当初に比べて覇気がない。

（——いける）

焰はこの状況に、うつすらと絶望に希望を見出し始めていた。その現れに、口元には小さな笑みさえ浮かんでいる。

天人が来てから、一気に状況が好転した。

足元にいる味方には攻撃を当てず、常にリオレイアのみに矢が突き刺さるその技量。

何より、先ほどからは考えられないような勇ましさ。

押し引きの見極めも上手い。

（——これなら、いける！）

恐らく、リオレイアはもう瀕死の状態だろう。このままいけば、あるいは狩猟したモンスターリストにリオレイアの名前が刻まれるかもしれない。それは、ハンターにとっては大きな意味を持っている

た。

慢心しきつた焰はより一層激しく？スノウツインズ？を振るう。

そんな焰の様子を遠目に見て、天人はえもいわれぬ危機感を感じていた。

収まっていたはずの炎がまたリオレイアの口からちろちろと見え始めている。これは激昂している何よりの証拠だ。

「焰！ 引け！」

天人が声をかける。しかし、焰は恍惚とした表情のまま一心不乱に双剣を振るい続ける。

「大丈夫！ このまま——」

不意にリオレイアが立ち上がり、焰の言葉が途切れた。全身を血にまみれさせたりオレイアの迫力はより一層強まっており、一睨みされただけで焰は固まった。

普段なら余裕で反応できるような攻撃。しかし、焰は動けない。大木のような尻尾が振るわれ、焰の体を強く打った。握っていた双剣を再び落とし、無様に地を転がる。

「カハツ——」

肺の空気を全て搾り出されたような感覚。肺に空気を送り込もうと大きく息をするも、上手く息が出来ない。

「焰っ！」

肩膝を突いて胸を押さえて苦しむ焰めがけて、リオレイアが大きく体をしならせた。焰も何とか、回避は確実に間に合わない。

コンマ一秒の思考。

駆け出す。同時、そのまま右手にあるもの——愛弓の？アルクセロジョーヌ？を思い切り投擲した。

放たれる火球は、その投げられたものに遮られ、爆ぜる。爆風はかなり強烈なものだったが、それでも焰がこてんと尻餅をつく程度

で済んでいる。

それは、ぶちまけられた焰のポーチの中身の一つ。

視界を奪われ、混乱に陥るリオレイアは急接近する天人に気づかない。スライディングの要領でリオレイアの真下に潜り込むと、無造作に転がっていた？スノウツインズ？の装飾の派手な方を掴み、深々とリオレイアの腹に突き刺した。

「あああああああああああああああああああああああ
あああああああ！」

血にまみれた刀身が姿を見せた頃、リオレイアの腹は思い切り裂かれていた。つんのめるようにして天人は前転し、リオレイアの影から出る。

「やっ……た？」

先まで躍動していた巨軀は、もうぴくりとも動く気配がない。そこで、初めて実感する。

笑う。それは、安堵から来たものか。それとも、トラウマを克服したことから来たものか。あるいは、その両方なのだろうか。

ぐらりと天人の体が揺れた。そのまま受身も取らずに地面に倒れこむ。

「ちょ！ どうしたのあんた!？」

最後に、焰が慌ててこちらにやってくるのが見えた。それを見て、微笑む。

そうして、天人は気を失った。

エピソード

目が覚めたら、そこには見慣れない光景が広がっていた。まだら模様の天井は、おそらくユクモの木のものだろう。

朝日が眩しい。思わず右手で目を覆い、光を遮った。今は……どうやら朝らしい。

ふとももの辺りに妙な違和感を覚え、天人はむくりと起き上がった。

「……！」

自分のふとももを枕の代わりにして、いすに座ったまま浴衣を着た焰が安らかな寝息を立てていた。出かけた声を何とか殺し、忙しくなく周囲を見回す。

「ずっと付きっ切りだったのよ、天人くん」

「あ……」

「おはよう、天人くん」

「お、おはようございます」

少し間隔を空けて並んでいるベッドの上に、腕に包帯を巻いたりリリーが柔和に微笑んでいた。あれだけの火傷だったのだ。服に隠れて見えていないだけで、その腹部なども包帯で覆われているのは間違いなかった。

恐らく、ここはユクモ村の病院なのだろう、と天人は勝手に納得した。

包帯まみれのリリーの姿を見て、いたたまれない気持ちになる。自分が情けなかったから、リリーさんにこんな大怪我を覆わせてしまったと、自己嫌悪に陥る。

リリーはそんなしょんぼりとした天人を見て微笑みを少し困ったものに変えた。

「私のことなら気にすることないわ。天人くんを追い返したのは私なんだし」

「でも、俺があの時逃げてなければ……」

「それはそれで、結局全滅していた気もするけど？ 私」

「……」

「だから、この結末でよかったのよ。結局、誰も死んでないもの。あまつさえ、リオレイアを討伐すらしてしまったんだから」

「……そういえば」

「ここでようやく、天人は自分が成し遂げたことを思い出す。

あまりの現実味のなさに、そのことを失念してしまっていた。

（……リオレイアを、やったのかあ）

「これで、私と焰、そして君にリオレイアを討伐したっていう記録が確かについたわ」

「おお……やりましたね、リリーさん」

そういうと、何故かリリーを目を丸くした。天人はリリーの反応にきよんとする。

「やりましたねって……天人くん、自分が成し遂げたようなもののよ？ どうして他の人の手柄みたいに言うの？」

「え？ いや、だって……まあ確かに止めを刺したのは俺かもしれないけど、それはリリーさんや焰……さんがリオレイアを弱らせてくれたから——」

「それが、そんなこともないの」

天人の言葉を遮るようにしてリリーが言う。どういうことだ、と天人が眉をひそめた。

リリーは無自覚のうちにやっていたのか、と驚いたが、あくまで平然と天人に説明する。

「君の放った矢がとりわけ多く刺さっていた部分は、リオレイアの頭部、脚部、そして腹部よ。もちろん、翼や背中にも刺さっていたけど、割合的に言えば大したことない本数だったわ」

「はあ……」

「モンスターには、それぞれ弱点があるの。鱗が他の部位に比べて

柔らかかったりしてね。君の矢が多く刺さっていたこれらの部分は、その弱点だったの」

「そりゃまあ、刺さりやすいなあと思っていた部分を狙ってましたからね。そこが恐らく弱点だろう、とは思ってましたけど」

「……え？」

矢の刺さり具合によつて、どの部分が弱いのか、どの部分が強いのかを見極めていたのは事実だ。彼はこれを当然だと思つてたし、誰でも出来るもの、と勝手に思い込んでいた。

もちろん、そんなことを出来るのはある程度の経験を積んだハンターだけだ。

それをさも当然のように話す天人に、もはやリリーは驚きを通り越して呆れていた。

(……なんていうか、やっぱり天才っているのかしら)

はあ、とため息をつく。

「とにかく、リオレイアに与えたダメージの多くは君が与えたものなの。分かった？」

「別に、誰がダメージを多く与えたとか、どうでもいいんですけどね。結局、リリーさんと焰さんがいなかったら、俺は戦えなかったわけですし。最終的にあれですよ。うん、二人のおかげです」

屈託なく笑う天人。リリーはさらに目を丸くして、やがて力なく笑った。

そんな話し声で、焰もどうやら起きたらしい。がばつと頭を跳ね上げると、ぱちりと天人と視線が合った。

飛びつくようにして天人の両肩に手をかける。天人は驚いて身を引いた。

「ど、どうしたの？」

「どうしたの、じゃないわよ！ あんた、あたしがただ心配したと——」

「あらあら。焰ってば、心配してたんだー。そりゃそうよね、あれ

だけ狼狽して泣きじゃくってたんだから」

にやにやと意地悪な笑みを浮かべ、リリーが横槍を入れる。

な、と一瞬口ごもり、そうして顔を真っ赤にして焰はリオレイアのごとく激昂した。

「し、ししし心配なんてしてない！ 狼狽してない！ 泣いてもない！ か、勝手なことを言わないでリリー――！」

「あれー？ たった今、焰は天人くんに向かって『心配した』ってはつきり言ったよー？ ねー天人くん？」

蠱惑的な笑みで言うリリーに思わず赤面し、曖昧に返事を返す。

それを見ている焰は面白くない。怒りはさらに激しさを増し、天人はそんな焰を見て本当に火を吐くんじゃないかと思った。

そんな様子を楽しげに眺めるリリーをちらりと見やって、焰を少しだけ哀れに思う。

天人が焰をなだめ、怒りが収まるのを待って――ちなみに十数分ほど要した――リリーは徐に口を開いた。

「じゃああのクエストの報告をするね。まず、抜け落ちた情報に関して」

「……………」

間違はなく、あれは意図的に隠していただろう。リスクが高いほどクエストのランクも上がる。それと比例するように、報酬金額も上がる。小さな村に住む一般人がクエストを依頼する場合、こういったケースは少なくない。巨額の報酬を払うことが出来ないからだ。そして、その結果死に至ったハンターもまた、少なくなかった。

「まあ、案の定というかなんというか、リオレイアの情報を書き足すとしても報酬金額が払えなくなってしまうから、というものでした。あ、賠償金としてだけど、一応報奨金はでるらしいから、そこら辺は安心していいってコノハさん言ってたよ」

「はあ……………まあ分かっちゃいたけど、依頼人はハンターのこと死んでもいいとも思ってると思えないわよね、全く」

「あーそういえば結局ジャギイノス倒してないや……」
間の抜けた天人の声に呆れたように焰がため息を吐く。

「あんた……命落としかけたのよ？ 分かってる？」

「それでも、やっぱりさ。初めてのクエストぐらい、成功させたかったなっていうか」

焰はそこで目を丸くした。同様の反応をリリーも見せる。

「初めて……？ 本当に、初めてのクエストなの？」

「え？ いや、まあそうだけど……」

「それであの腕って……おかしくない？ なんであんな正確に狙いを定められるのよ」

「初めてのクエストでクルペッコにリオレイアと戦闘……しかもその二匹を討伐……はあ。やっぱり天才っているのね……」

二人して頭を抑える。天人はすごく居心地が悪い。

「いや、でも間違いなくリリーさんと焰がいなかったら死んでましたよ」

「それでも、よ。ねえねえ、どうやって腕磨いたの？」

好奇心をむき出しにして尋ねてくるリリー。焰も興味があるようで、その視線は天人から外れない。

天人本人としては、大した特訓なんてしていなかったたので、二人の期待は少々荷が重かった。

「別に何もしてないですよ。故郷でケルビ狩りしてただけです」

「……何年間ぐらい？」

「何年……五年ぐらい、でしょうか？」

納得、といわんばかりに頷く二人。

ケルビは比較的穏やかな草食モンスターだ。似たようなモンスターに北のほうに住むガウシカがいるが、こちらはケルビに比べてやや大きく攻撃的である。

小型で俊敏なケルビを狙うのは大型モンスターを狙うよりも難しい。初心者弓使いもまずこのモンスターを狩ることで扱いに慣れるのが一般的だ。

そんな基礎訓練を五年も積んでいたとあれば、あの正確な狙いも納得がいくというものだ。

「そんだけ長い間ケルビ狩り続けてれば、そりゃあ上手くもなるわよね」

「ケルビだけじゃないですよ。ブナハブラなんかも狩ってました。

ブナハの素材はあまり市場に出回らないから、意外に需要あるんですよね」

「……………」

ブナハブラは昆虫型のモンスターである。大きさはケルビよりさらに一回り小さく、尚且つ空をちょこまかと飛ぶので、ケルビよりも遙かに狙いにくい。

二人は頭を抑える。関心も一回りして呆れてしまったようだった。彼の才能はどうやらそれ相応の努力も相まって結果を出していたらしい。

「そついえば、ブナハブラといえば……天人くんの武器の？アルクセロジョー又？なんだけど……………」

「う……………」

「あー。そついえば」

焰が思わずうめく。言われて初めて天人は思い出した。焰を火球から守るために、思い切り投げつけた拳句、爆砕されたのだ。

言いずらそうな様子なりりーとうなだれる焰を見て、なんとなく天人は自分の愛弓がどうなったのか悟る。

「やつぱり、ダメでしたか……………」

「ごめんね。一応、ギルドの人が残骸を拾い集めてくれはしたみたいだけど……………」

木箱を渡され、その中身が開かれる。そこには、すすこけた虫の羽やら金属片やらが転がっているだけ。

元々、壊れるのを承知で投げつけたのだから、後悔こそしていないものの、こうしてばらばらになった愛弓を見ると少しだけやるせ

なさが心に残る。

「……ごめん。あたしが、天人の言うこと無視して先走ったから……」

「気にすんなって。壊れたら、また新しいのを作ってもらえばいいさ」

そう言う天人の気丈さを見て、さらに落ち込む焔。

確かに、素材さえあれば同じ武器は作ることには出来る。しかし、それは厳密に言えば同じでは決していないのだ。

二度と同じ絵が書けないように。二度と同じ武器が出来ることはない。微妙なクセはもちろん、使い込めば弦の強度は変わってくる。使い手に馴染んでくるのだ。

ハンターの間では、これは常識だ。武器は自分の分身だと言うハンターさえいる。

しょんぼりと肩を落とす焔をどう元氣付けようか悩んでいる時、リリーがうつすらと笑っていることに気づいた。

「どうかしたんですか？」

「うん。実は、天人くんの弓の件なんだけどね」

そう言つて、がさがさと袋から何かを取り出すリリー。二人は互いに見合つて首をかしげた。

じゃーんと言つてリリーが掲げたそれを見たとき、二人は揃つて声を上げた。

「ど、どうしたのそれ！」

「これ……リオレイアの弓、ですよ……？」

「？クイーンブラスター？。私たちと天人くんが討伐したりオレイアの素材を使って作ってもらいました。あ、もちろん制作費は私たちもちだから心配しないでね」

はい、と差し出される？クイーンブラスター？？を天人はじつと見つめる。そして目だけはららんと輝かせたまま、首を振った。

それが拒絶の意味だというのは言うまでもない。リリーと焔は眉を潜める。

「どうして受け取らないのよ。これで武器の件はチャラよチャラ」
「受け取れないよ。だって、それは俺の分の剥ぎ取り素材だけじゃなくて、リリーさんや焰の素材も使われてるんだ」

「焰の命に比べたら軽いわ。救ってくれたお礼なんだから、受け取っちゃいなさいって」

「……いや、やっぱり受け取れません」

少しの逡巡と、拒絶。リリーはうーんと悩む。焰はそんな天人にイライラとし始める。

やがて、何か思いついたようにリリーの顔が華やいだ。

「じゃあ、天人くんはこれで私たちに貸しを作ったってことにしましょう。素材は後で返してもらっわ」

「……？　どういう——」

はっとしたように焰は口を閉ざしてリリーの顔を見やる。頷くリリーを見て、にやつと不適に笑った。

二人で勝手に納得している様子をじーっと見て、なにやら嫌な予感。しかし、その予感は外れる。

「天人くんには、私たちのパーティに加わってもらいます」

「……………は？」

ぽかんと口を開け、なんとも間の抜けた声を出す。

リリーと焰はというと、顔を見合わせてとても楽しそうに笑っていた。

「どういうこと？」

「どうもこうもないわ。要するにあんたはあたしたちのパーティに入るってこと。何か問題ある？」

「いや、俺の方はぜんぜんないけど……いい、の？」

「大歓迎よ。私たち、ちょうどいい腕を持ったガンナー探していたところだし。私たち二人だと、どうしても穴が出来ちゃうのよね」

「で、でも、俺まだ完全に飛竜に対する恐怖心が拭えたわけじゃな

いですよ？　今回だって最終的に気絶しましたし……」

「それはあたしたち全員でなんとかする。？パーティの問題？なんだから」

パーティの問題。

そう言ってもらえたことが、ぐつと心に響く。

「決めるのは君だよ、天人くん。私たちのパーティに参加するかしないか、全ての決定権は君にある」

？クイーンブラスター？？が差し出されて、参加の意向を問われる。

「……………」

ユクモ村に来て、まだ一週間も経っていない。だというのに、こんなにも自分を買ってくれる人がいるということが天人は嬉しかった。

何より、自分を心配してくれて、信頼してくれる仲間が。

「……これぐらいの貸し、すぐに返してやりますよ」

そして、天人はその？クイーンブラスター？？を手に取った。リリーが微笑み、焰が満面の笑みを浮かべる。

「これからよろしく。今更な感じがするけど、俺は凍月天人。年は十八。使用する武器は弓だ」

天人が手を差し出し、握手を求める。

「東雲焰よ。年は十七。双剣使い。パーティに参加するのはいいけど、足だけは引っ張らないでよね」

「リリー・アイスバーン、十九歳。使う武器は太刀だよ。一応、パーティのリーダーやってます。よろしくね」

焰がその手を取ろうとした時、ふっとリリーが割り込んだ。柔らかい微笑を向けられて、慣れてない天人は赤面する。

むきになって焰がリリーの手を強引に振り払い、天人と握手する。しかも、そっぽを向いたまま。天人はよく分からずに苦笑いのまま

首を少しだけ傾けた。

「あらあら。焰？　あなた、私が握手するのを待つことも出来ないの？」

声になしに棘がある気がした。

「リリーが割り込んだんでしょうが」

「順番なんて誰が決めたの？　先に手をとったのは私よ？」

「流れるにあたしが最初だったでしょっ」

「ふーん？　何々。つまり天人くんの手をいち早く取りたかったのねー焰は。そうと言ってくれば一番譲ったのにー」

「な、何言ってるのよ！　そんなわけないでしょ！」

「なら問題ないじゃない」

「うーうー！！」

「あ、あの……ここ病院ですよ……？　もう少し静かに……」

こうして、天人の狩猟生活は好スタートを切ったのだった。

足りない要員（前書き）

どうも、綿雪ましろです。

気になって覗いて見たらユニークアクセスの伸びが思った以上によかったので不定期亀更新でこれからも続けようと思い、こうして続編を投稿させていただきました。

かなりの低速更新になるとは思いますが、今後ともよろしく願いいたします。

足りない要員

照りつける日差しに、意識が朦朧とする。最後のクーラードリンクの冷却効果がどうやら切れたらしい。

「ハッハッハ——」

小刻みに息を吸う。足が鉛のように重い。命を守る防具すら鬱陶しくなってくる。

(——)

体がふらりと揺れる。

「あともうちよつとだよ！ 頑張って天人くん！」

「ここが正念場よ！ 根性見せなさいっ」

途切れそうになる天人の意識を二人の声が何とかつないだ。そうだ。何も頑張っているのは一人だけではない。リリーも焰も苦しいに決まってる。

倒れそうになるのを何とか踏ん張り、鋭い相貌で弱りきった敵を睨む。

土砂竜、ボルボロス。乾燥地帯の泥沼に住み、体に泥を纏うことで日照りから身を守るといふ獣竜種だ。

餌であるオルタロスの蟻塚は長い間日照りに晒されてレンガのようになくなっていく。それを突き崩すために発達した頭殻が特徴的なモンスターだ。

その発達した頭殻を活かした突進攻撃は、単調な攻撃ではあるが非常に危険で、受ければ骨の数本は持つていかれかねない。もちろん、そうなるてしまえば戦闘は不可能だ。

他にも、外敵——縄張り争いをする大型モンスター、そして言うまでもなくハンターもこれに含まれる——から身を守るため、体に纏った土砂を飛ばして攻撃してくる。これも非常に厄介で、ボルボロスの体液と混ざった泥は粘性が強く、一度ハンターに着くとな

かなかはがれない。防具が重くなり、それだけハンターにかかる負担が大きくなる。その結果、移動速度の低下を招き、突進を受けやすくなる。

ただ、乾燥さえすればポロポロと剥がれるので、ずっと泥を身に纏ったまま、ということにはならないのだが。

既にお互いに満身創痍。定められたリミットも近い。弱音を吐いてなんていらなかった。

ルドロス装備一式に身を包んだ天人はボルボロスの真正面に捉えられないように走りながら愛弓、？クイーンブラスター？？を再び展開する。

これが最後。そう言わんばかりにボルボロスが雄叫びを上げた。同時に突進のモーションに入る。

灼熱の大地を疾駆するその体には、三人のハンターに囲まれて無数の裂傷と刺傷があり、さらには数え切れないほどの矢が突き刺さっている。

リリーが斬り払いで、焰がステップで同時にボルボロスの足元から離脱する。結果として視界に入るのは天人となり、ボルボロスは彼を目掛けて猛然と走ってくる。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

揺れる意識を繋ぎとめるために咆哮し、全力で走る。その姿をボルボロスが追う。その巨軀と交錯する寸前、大きく飛び込むようにして前転、回避すると素早く身をよじって反転させる。同時に弓を引き絞り、思い切り天へと放った。

「な！？」

「はあ！？」

天人のとんでもない芸当にリリーと焰が仰天する。

ボルボロスが止まるであろうそのポイントを狙っての曲射。並みのハンターがやったとしても、決して当たらないような無謀な攻撃

だ。しかし、彼は決して並みのハンターと呼ぶにはかけ離れた技術を持っていた。

ボルボロスが足を止めたその地点に、矢の雨が降る。重力に引かれた矢は次々とボルボロスの甲殻を穿ち、突き刺さっていった。ぐらりと巨体が揺れる。一瞬後、砂煙を上げてボルボロスは倒れた。ぴくぴくと数度痙攣した後、完全に動きを止める。

「……ボルボロス、狩猟完了」

二人の方へと振り向いて、へにやりとした笑顔で天人は言った。

「かんぱーい！」

ユクモ村のとある酒場で三つのグラスが軽快な音を鳴らす。三人ともそのままぐいぐいと豪快にドリンクを飲み干した。

ユクモ名物、？採酒？。アルコール度数が低めな甘酒の一種で、ジューズ感覚で飲めるのが評判だ。もちろん、もっと強い酒もありはするが、そんなものを飲んでは話し合いが出来ない。

三人は狩猟の後、決まって反省会を開いていた。元々は駆け出しだった頃のリリーと焰がクエスト失敗を無くすために行っていたものだが、今となってはすっかりと習慣になっており、クエストが成功しようと失敗しようとして開くようになっていた。それは天人がパーティに加入しても変わらずに続いていた。

ちなみに、三人とも姿は浴衣である。

「つくうー。狩猟後の一杯は格別に美味しいわ。このために狩猟してる、あたし」

「大げさすぎよ、焰」

恍惚とした表情で言う焰に苦笑してリリーが突っ込む。一瞬でむっとなる焰を、同じく苦笑した天人がフォローする。

「まあ言いたいことは分かる気がするよ」

「でしょう！ 流石天人。話が分かるわね」

「なーにを言ってるのよ。あなたが怒るのを防ぐために話を合わせているだけよ。なー？」

「なー、って言われても……」

「ふーん？ 否定はしないんだ？ 結局あんたもあたしを怒らせないために話を合わせてただけなんだ」

「……………」

「こら焰。天人くんを困らせないの。黙り込んでたじゃない」

せつかくのフォローを台無しにしたのはリリーであるにも関わらず、この言い草である。天人は辟易した。

「リリーさんも焰をからかうのは止めてください……最終的に俺が焰をなだめることになるんだから」

「あらー。それが楽しいんじゃないの」

「……………」

満面の笑みでそんな暴言を吐くリリーに、天人は今度こそ絶句した。焰の方は慣れているのか、不機嫌そうにそっぽを向く。

「止めておきなさい、天人。リリーは性根捻じ曲がってるから注意したところで無駄よ」

「性根捻じ曲がってるって……言ってくれるわね、焰」

「あら？ 事実でしょう？」

挑発的に言う焰に対し、リリーがとった行動は、

「うわーん！ 焰が酷いこと言うー！！」

「っ！！」

「なー！？」

わざとらしく泣いたフリをして天人の腕にしがみつく、というものだった。咄嗟のことに天人は対応できず、そのまま左腕を許してしまう。

焰が目に見えて紅潮した。直後、慌てて席を立ちリリーを天人から振りほどきにかかる。

「は、な、し、な、さ、い！」

「嫌だよー。絶対話さないもんねー」

「いだだだだだだ！ 二人とも痛い！ 痛いから！」

またやってるよあのハーレムビギナー、と天人にとってとても不名誉なことが周囲から苦笑気味に聞こえてくる。ただ、ヒートアップしている二人の耳には入ってこないようで、全く力を緩める気配がない。むしろどんどん強くなってきている。

しかも、夢中になってしがみつくりリーの柔らかい部分が押し付けられて天人は余計に慌てる。

「えっへへー。羨ましいでしょー焰。右腕なら空いてるよー？」

「リ、リリーさん！？ 酔ってませんか！？ って焰もリリーさんの言うこと真に受けてこつち見てないで解くの手伝ってくれよ！」

「べ、別にあなたの右腕なんて見てないわよ！」

「そこまで言ってないぞ！？」

「っ！？ は、謀ったわね！」

「もう……焰も素直になればいいのに。そんなだと私、本気で天人くん貰っちゃうわよ？」

「な、な、何を言ってるのよりリー！」

「そ、そうですよりリーさん。心臓に悪いんでそういう冗談は止めてください」

天人は既に二人から好意を持たれていることはなんとなく知っている。というか、こんな感じで積極的にアピールしてくるのだから気づかない方がおかしいというものだった。

心臓に悪いのはリリーの発言そのものではなく、嫉妬の念が込められた周りの男からの視線である。ちらりを周囲を窺えば、殺意すら籠っているような目で天人の方を見ている男性客が数人。

天人は今のを見なかったことにして、いろいろなものに冷や汗を

流しつつもなんとか場を收拾しようと努めた。

「今日の反省会をするんですよね？ 雑談もこれぐらいにして、さつさと本題に入りましょう。ほら、二人とも席について」

天人に促され、しぶしぶとした様子で二人とも席に着く。普段こそ普通の少女となんら変わらない(?)二人だが、ハンターとしての意識は高く、狩りに関するなんらかの話題を出せば真面目に話しに応じる。そのことを天人はこの一月で理解していた。

「反省するほど危なかったかな、今回」

「まあ、危なげなく、と言っても過言ではない狩りだったわよね。最後の天人の蛮行にはかなり驚いたけど」

「蛮行って……一応ちゃんと当てたじゃないか」

「だからってあんな無茶なこと、普通のハンターならやらないわよ。ボルボロスの突進は確かにこちらを狙って来るけど、速度の関係で大して曲がれないんだからもつと大きく距離とるように走りなさいよ。なんであんなギリギリのところで避けようとするのよ」

「いや、あれは距離を測ってたから……」

「……………」

「なんていうか、もう天人くんには呆れて何も言えないわ……」

焰が言葉を失い、リリーが頭を押さえてうめくように呟く。天人は二人の反応を見て、気まずそうに視線を逸らし頬を掻く。

このようなやりとりも既に何度も繰り返している。今更もうリリーも焰も天人の規格外の才能に、出会ったばかりの頃のように大げさに驚いたりしなかった。

「まあ、天人くんのスペックが異常なことは今に始まったことじゃないし、それは置いておくとして」

「そろそろ打撃系統の武器を扱える人がパーティに欲しいわね」

「そうだね。ボルボロスの頭殻、硬くて二人とも弾かれてたし」

近接武器の系統には二種類ある。一つはリリーと焰の扱う太刀や双剣が持つ？切断？。もう一つはハンマーと狩猟笛が持つ？打撃？

だ。

二つの系統の違いは聞いての通りである。切断の系統を持つ武器はモンスター斬りつけてダメージを与えていく。対して打撃はモンスターを殴りつけてダメージを与える。

この二つの系統にはしかし、それだけではない大きな違いがある。切断の系統はモンスターが巨大な尻尾を持つ場合に限り、それを切断することが可能なのだ。打撃系統にももちろんこのような芸当は出来ない。

この系統は近接武器の大半を占める。片手剣に始まり、大剣、太刀、ランス、双剣、ガンランス、スラッシュアックス。さらには最新技術によって開発された？斬裂弾？という特殊な弾丸を使用することでボウガンでもこの系統の攻撃をすることが出来る。

一方の打撃はモンスターに眩暈を起こさせることが出来る上に、疲労を加速させる効果があることも最近の研究で明らかになっている。これは切断の系統にはない効果で、メンバーに一人は打撃要員が欲しいとされる所以でもある。また、切断系統の攻撃に比べて遥かに弾かれにくく、隙が出来にくいことも違いの一つだ。

この系統を持つ武器はハンマーと狩猟笛が主に上げられる。扱い方によっては大剣やランスでもこの系統の攻撃が出来るが、あまり一般的ではない。実は弓の？曲射？も打撃に分類される攻撃で、モンスターのスタミナを大きく奪う。うまく頭に当てれば眩暈を起こさせる事だって可能だ。斬裂弾と同時期に開発された？滅気弾？によるボウガンの攻撃でも同様だ。

現在、天人達のパーティにはこの打撃要員がない。天人の弓による曲射があるので全く皆無、というわけではないが、無論曲射だけ使い続けるというわけにもいかない。

前々から引き入れようという話は上がっていたのだが、今までのモンスターの肉質は比較的軟らかく——リオレイアは除いて——いなくても大して問題なかったので真剣には考えてこなかった。

だが、いよいよ特定部位とはいえ刃が通らない敵が出てきて、真剣に考えないわけにもいなくなってきた、というわけである。

「かといってさ、どうしようもないわよね……。そんな簡単にパーティに引き入れられたら、あたし達今頃四人でパーティ組んでるはずだし」

「最初からそんなこといつてたら始まらないでしょ。弱音吐く前に何か考えを出しなさいよ」

「それはそうだけども……。だけど現実問題として入ってくれそうなハンマー使い、ないし笛使いなんて思い浮かばないんだけど？」

「……………」

現在、ユクモ村には約四十名ほどのハンターがいる。ロックラックの街のようなハンターの街ならいざ知らず、それぐらいの数であればほとんどのハンターが顔見知り、というのもさほど珍しいことではあるまい。

焰の言うとおり、彼女達が思いつく限りで？全ての条件？を満たすハンターはこのユクモ村にはいなかった。

天人はユクモ村に来たばかりなので、こういうことはよく分からない。ただ二人の話を聞いているだけで、特に意見を述べたりはしなかった。

「そうね。確かに考えても始まらなさそうだし、とりあえず手当たり次第ソロの使い手に声かけていこっか」

そういうリリーの表情は普段のような明るい笑顔ではない。取り繕ったような作り笑いだった。

付き合いが長く事情も通じている焰には分かったが、天人にはそんなことまで分からず、いつもの笑顔で了解と首肯する。そんな無邪気にも見える天人の様子を見て、リリーと焰は気まずそうに顔を逸らした。

ユクモ村にいるハンターの内の約八割はパーティを組んで活動し

ている。元々ソロで狩りをするハンターの方が異端なのだ。

確かにパーティでクエストを受ければその報酬は均等に振り分けられ、ソロで受けるよりも一人当たりの金額は安くなりやすくなるもの、その分狩猟の効率上がる。結果的に受注できるクエストの数が増えるのでソロで狩るのと同程度には稼ぐことが出来るのだ。

その上、ソロで狩るよりもその危険度は大幅に下がる。モンスターのターゲットがパーティの人数だけまばらになるからだ。

では、パーティの人数が多ければ多いほどいいのではないかという疑問が浮上するが、これもそうではない。パーティは原則として四人までと決まっている。

報酬を分ける上である程度の額を得ることの出来る最高の人数であるという理由もあるし、古くからのしきたりでもあった。

パーティを組んでいない残りの二割は、パーティ内で問題——例えば、狩猟の方向性が合わない、報酬の振り分けかたが気に入らないなど——が発生し、その結果としてソロで狩りをしたほうがいいという結論に至ったハンターがほとんど。

そうなってくると必然的に新米ハンターにメンバー加入を考えるパーティは目をつける。一月ほど受けるクエストの内容や量をチェックし、実力があるようだと判断されたら勧誘する、という流れが一般的だ。実力が認められなかったハンターの大多数は基本的にハンターという過酷な職業を辞めていく。ハンターとは花形の職であると同時にかなり残酷な職でもあるのだ。生き残るために優秀な種だけが残る。完全な実力社会。

その点、天人は例外と言えた。この場合、天人よりも優秀なガンナーを引き入れることが出来たりリリーと焰の方が見方によつては天人よりも幸運だったのかもしれない。

そしてその新米ハンターの数は決して多くない。精々数ヶ月に一人や二人出てくる程度だ。また、その新米ハンターが現れたとしてもお目当ての要員じゃなかったり、実力がなかったりしたら意味がない。加えて、他パーティとの競争もある。

こういった理由で、パーティ勧誘が難航することがリリーと焰には経験上、分かっている。そもそも、天人が入る以前二人で狩りをしていたのもそれが理由である。入れたくても入れられない。そんな現状がユクモ村にはあった。

そしてもう一つ。彼女達にはどうしても譲れない条件があった。

「それじゃあ、とりあえず明日から手当たり次第ハンマーか笛使いに声をかけてみますね」

「それなんだけどね。あの、天人くん。一つお願いがあるんだけど……」

リリーがこうやってはつきりと言わないのは珍しい。現状を知るリリー達からしてみれば、それは単なるわがままだという自覚が少なからずあったため、知らず知らずのうちにこんな話し方になってしまっていた。

「なんですか？」

「男のハンターは勧誘しないで」

言いづらそうにするリリーに代わって焰が素っ気無く答える。

「……え？」

「だから、男のハンターは勧誘するなって言ってるの。あんたはもうあたし達のパーティに加入してるって知られてるんだから」

「ど、どうして」

「不埒な考え持って入ろうとする輩を入れないようにするためよ」

「昔、ちよつといろいろとあったのよ」

仏頂面で不機嫌そうに答える焰の説明をリリーが苦笑いで補足する。

曰く、リリーと焰は一時期、三人でパーティを組んでいたことがあった。もう一人のメンバーはハンマー使いの男で、実力は確かなものだった。

ただ、女癖が悪く、度々リリーと焰にセクハラじみたことをしてきたためにあっさりと罷免。それ以来、男性のハンターを信用して

いない、と。

そんな話を聞いた天人が途端に渋面になる。

「もしかして俺もあんまり歓迎されてません？」

「あんたは別よっ！」

「そんなことはないわ！」

ほとんど同時に焰とリリーが叫んだ。数秒の間微妙な空気が流れるも、リリーの咳払いでそんな空気も一蹴される。

「とまあ、とりあえずそんな訳だから、勧誘は女性ハンターだけで」「分かりました……」

男のハンターに優先的に声をかけようと思っていた天人は少々元氣なく答える。この今にも後ろから刺されそうな状況を変えられないと、しかももしかしたらより悪くなるかもしれないと思うと天人は気が重かった。

その後、多少の雑談も交えながら反省会を終えた三人は解散した。かくして、狩猟とはまた違う、しかしかなり手強い戦いに天人は臨むのだった。

足りない要員（後書き）

次回は10月22日（土）午前9時に投稿予定です。

相変わらずの駄文なので期待せずに待っていてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5654w/>

MHP3rd 天を穿つ弓

2011年10月10日03時11分発行